# 忘れられた祈り

葉月羽音

## 序章　御伽噺という名の喜劇の幕開け

御伽噺のようなお姫様になれたら、彼女の運命は変わっていたのだろうか。
例えば白雪姫。生まれ持った美貌に嫉妬した義理の母たる王妃によって城を追われた揚句、林檎を使って毒殺される。
けれど、彼女は森を彷徨っていた王子様の口付けによって息を吹き返す。
例えば眠り姫。悪い魔女に呪いを掛けられ、紡ぎ車の錘で手を刺してしまうけれど、良い魔女の呪いで一命を取りとめ、深い眠りにつく。
しかし、後に現れる王子の口付けによって彼女は目覚める。
王子様と口付けを交わした二人の姫君が迎えるものはハッピーエンド。だが、彼女にはそれが訪れない。
彼女は毒林檎を食べても食べなくても死んでしまうし、紡ぎ車の錘で手を刺そうが刺すまいが深い眠りについてしまう。
最終的には息を吹き返すことなく二度と眼を覚ますことはない。
彼女には王子様なんていない。御伽噺のようなハッピーエンドは迎えられない。
訪れるのはバッドエンドだけ。胸元に一輪の薔薇が咲いたその瞬間から決まっていた運命なのだ。

御伽噺のような王子様になれたら、彼の宿命は変わっていたのだろうか。
例えばシンデレラ。王子様の為に開かれた舞踏会で、魔法を掛けられたシンデレラに一目惚れ。
互いに見つめ合い、ダンスを踊りながら夢のような一時を過ごしたのに、シンデレラの魔法が切れてしまう瞬間に別れを迎える。
しかし、彼は残された硝子の靴を片手にシンデレラを探し当てた。
例えばラプンツェル。綺麗な歌声に惹かれ、魔女の合い言葉を使って王子はラプンツェルと出会い、逢瀬を重ねる。
それが魔女にばれてしまい、二人は引き離される。王子は悲しみのあまり塔から身を投げて両眼を失明してしまうが、
数年彷徨ったその先で、ラプンツェルと可愛らしい双子に出逢うのだ。
二人の王子様が求めるままに辿るハッピーエンド。だが、彼にはそれが紡げない。
彼は硝子の靴があってもなくても愛しい人を探し出せないし、両目を失明して彷徨っても彷徨わなくても出逢うことはない。
彼には愛しい人なんていない。御伽噺のようなハッピーエンドは辿れない。紡げるのはバッドエンドだけ。
胸元に一輪の薔薇が咲く者が生まれたその瞬間から決まっていた宿命なのだ。

白き彼女は微笑う。
「お姫様になれなくてもいいの。私は十分幸せなのよ。」
胸元に咲いた薔薇一輪、愛しそうに指で撫でては微笑うのだ。

黒き彼は嘆く。
「王子様になんてなれやしない。俺は奪うことしか出来ない。」
胸元に咲く薔薇一輪、摘み取る為に振り上げた刃を嘆いた。

白と黒。二色の相容れぬ色が零した忘れられた祈り。
名付けるならそれは――「メメント・モリ」

「死」という鎖に繋がれた二人の結末を彩る祈りは何色なのか――

# 第一話　白き少女の憂鬱

微睡む意識がふわりと浮かぶ。ふるりと震えた二つの瞼がゆっくりと開かれる。幾度か瞬いて、瞳に映るのは天井を染める白。変わり映えしないその色を映しながら、少女――ノワールは眼を醒ます。
しばしぼんやりとした様子を見せる彼女は無意識なのだろう、そっと手を動かして胸元を強く掴んだ。白い指先が服に食い込み、皺を作る。まるでその下に隠された何かを握り潰したいといわんばかりだ。
自然と詰められた息を吐き出し、ノワールはハッキリとした光を瞳に宿す。ベッドに横たえていた身体を起こし、胸元を掴んでいる指を一本ずつゆっくりと解すようにもう片方の手で外していく。全て外れた時には皺苦茶になった胸元の布地が情けない姿で現れる。自分でやったことなのだが、これは少しやりすぎたようだ。苦笑いとともに皺を伸ばそうと布地を引っ張るのだが、引っ張った時は伸びても放せばまた皺は出来てしまう。
――本当にやりすぎてしまったらしい。浮かべた笑みが困った様に深まるのだが、してしまったことはどうしようもないと早々に諦める。こういうことは諦めが肝心なのだ、なんて、無駄に悟ったふりをしては現実逃避。此処にいることで慣れてしまった作業の一つだ。

「今日も生きられるのね、私。」

小さな声で落されたそれはとても深く、重い。簡単に紡げるような言葉ではないと解っていながら、ノワールは至極あっさりとそれを紡いでしまう。微笑いながら、明日の天気を口にする気安さで。
ノワールは産まれたその瞬間から心臓に病を患っていた。そしてその病は治ることはないと医者だけでなく全ての人間が断言できるほど重い病だった。
何故医者ではない素人とも言える人間にもその判断が出来るのか。それは彼女の胸元に咲く一輪の薔薇が原因だ。
この薔薇は刻印のように胸元に刻まれる。大抵は突如として現れるのだが、ノワールの場合は産まれた瞬間からその刻印を胸に刻んでいた。産声を上げて産まれた我が子の胸に咲いた一輪の薔薇。それを神の奇跡と言う者はおらず、悲劇と嘆くものしかいない。
薔薇の刻印は死神の花嫁を意味する。その刻印を持って産まれた人間は、遠からず死と共に訪れる死神によってその魂を奪われるだろう。
伝承のように人々の間で伝えられてきた言ノ葉。実際にその刻印を胸に刻んだ人間は早ければ刻まれたその瞬間に、遅くとも二十歳を迎える前に死神によって魂を奪われていた。
ノワールは現在16歳。残り四年生きられるかどうかは解らない。全ては死神が決める事。いや、もしかしたら神が定めているのかもしれない。
どちらにせよノワールは迫りくる終わりから逃れることは出来ない。

――死神によって確実に死を、与えられるのだから。

刻印と共に与えられたであろう心臓の病は死へのカウントダウンの代わりの様なものだ。医師達はこの刻印と病に「メメント・モリ」という名を付けた。その言葉通り「死を想え」という皮肉った意味を込めて。

「いつか死を迎えると解っていて閉じ込められるのは、正直退屈ね。」

零れた溜息と隠そうともしない本音が入り混じる。病院で暮らす退屈凌ぎにと渡される本は全て読み終えてしまった。新たな本を運んでくれる人間はもういない。彼女の家族は皆、彼女の現実を受け入れられずに逃げ出したのだ。
かと言って暇潰しの話相手になってくれるような人はいない。ノワールは病室から一歩も出る事を許されていない上に、病室に訪れる人間は医師や看護師と言った関係者のみ。その彼らも時折検査の為に訪れては必要な事しか喋らない。
それもそうだろう。どれだけ手を施しても掬えぬ命なのならば、他に救う可能性のある命を優先するのが当たり前だ。
だからと言っておざなりな検査をするわけではない。一つ一つ真剣な眼差しで病状の経過を観察する。それが今後同じ病に倒れる者を掬う鍵になると信じて。
ノワールはそれを滑稽と思いながら拒絶することはない。医師達が信じるそれが本当に叶えられるのならば、この身を差しだすのは惜しまない。
自己犠牲と言われようと、偽善だと言われようと、彼女にはどうでもいいのだ。結果的にそれが同じ被害者を出さずに済むと言うのなら。
だが、滑稽に思う事だけは赦してほしい。何故なら、どれだけこの身を観察しようとも意味が無いことくらい誰もが解っているのだから。
解っていてなお縋るように医師が治療を施す事の滑稽さを哂わないだけマシだと思って欲しい、なんて願うのは――それこそ滑稽だろうか。

「この退屈が少しでも消える何かが、現れたらいいのに。」

いっそこの命を刈り取る死神が眼の前に現れてくれたって構わない。そんな事をひっそりと思いながらノワールは静かに微笑う。無理な願いと知りながら、祈るようにそっと両手を合わせるのは、唯の気紛れで。
それに応える様にノワールの眼の前に音を立てることなく空間を裂いて現れた少年もまた、気紛れの産物なのだろう。
絡んだ視線を解くことなく、タイミングのいい来訪者に間の抜けた驚きの顔を向けながら、ノワールはそんな事を呑気にも考えていた。

## 第二話　黒き少年の深淵

神が創り出した箱庭――天国と誰もが口にするその場所には光は無く、常に宵闇が全てを支配していた。唯一の灯りは夜空を輝く星のみ。天国と言うにはあまりにも殺風景なその場所で、唯一色を持つ事を赦された赫き薔薇。凛然と咲き誇るその姿は闇に呑まれることなく輝きを魅せる。蕾を膨らませるモノ、満開に花開かせるモノ、一枚ずつ花弁を枯らしていくモノなど、様々な姿で箱庭を埋め尽くす。まさに薔薇園と言う名の楽園である。
しかし薔薇はただ咲き誇るだけが役目ではない。与えられた赫は命の色を示し、枯れて逝く花弁は命の長さを示す。

――箱庭に咲く薔薇は人間の魂そのものなのだ。

箱庭に芽吹けば魂は産まれ、色付いた蕾を付ければ人間の腹に宿り、徐々に開く花弁は人間の人生を辿り、赫色を茶色にくすませた薔薇は生の終わりを告げる。延命はありえない。何故なら朽ちるその瞬間に薔薇を刈り取る役目を担う死神――ブランがいるからだ。
ブランは産まれたその瞬間から死神であることを神に定められた。人間と同じ肉体を持ちながらも神が定めた命の期限を摘み取ることを宿命として生きる。
死神は死を与え、生を奪う。そして全てを記憶する者でもある。ブランはこれまで摘み取ってきた命の全てを覚えていた。同時にその命の嘆き、苦しみ、生に対する執着心をまざまざと見せつけられてきた。
特に胸元に薔薇を抱く病者――人間達はそれを「メメント・モリ」と言うらしい――は強く彼に訴えかける。死にたくない、まだ生きたい、と。しかしブランにはその気持ちは解らない。理解することが出来ない。
彼には生はあるが、死は存在しない。他者の生を奪うことはあっても、己の生を奪われることはない。ブランにとって死は常に身近にありながら、眼の前には存在しなかった。生まれた瞬間に永遠を定められた彼に終幕は訪れない。
だからこそ死を与える存在として在ることが許された。生を奪うその咎を贖う為に永遠を生きるのだから。それを苦痛に思ったことも、寂しく思ったことも、ブランには一度たりとてなかった。今の今までそれが当たり前だったのだから。
ブランにとっての当たり前は、病者にとっては当たり前ではない。永遠の命を持たないからこそ限りある生に執着し、死を目前にして恐怖を抱く。そしてその矛先は命を奪う者であるブランにも向けられるのだ。
ある者は縋りついて、ある者は遠ざかりながら、ある者は痛みに呻きながら――皆、死神に生を乞う。しかし彼は病者の声に耳を傾けない。

「死を望む者はいない。しかし、逃れられる運命は一つもない。」

そう言っていとも簡単に胸元の薔薇を刈り取っていく。大鎌を使って、痛みを感じさせず抵抗すら赦さずに奪い去る。それは一種の優しさなのか。それともただ冷酷なだけなのか。どちらにせよ、彼は宿命に忠実なだけである。そう在れと産み落とされた瞬間から、ブランにとっての全てはそれだけなのだ。

いつも通りにブランは箱庭を見守っていた。一つ一つの薔薇を見つめ、枯れ逝く瞬間を逃すまいとゆったりと歩きながら彷徨う。
ブランの片手には背丈以上の長さを誇る大きな鎌が握られている。一振りで全てを屠れるだろうそれを、ブランは重さを感じさせない動作でゆっくりと動かした。
彼の視線の先には枯れかけた薔薇一輪。瑞々しさを失ってもなお、その出で立ちは背筋をピンと伸ばしたまま――音無くブランの大鎌によって刈り取られた。
同時に、闇空にひっそりと輝いていた星が一つ流れて堕ちる。詰めていた息を吐き出し、彼は瞼をゆるりと下ろす。

「――また一つ、命が終わりを告げた。」

誰に告げるでもなく自然と零れた言葉に感情は宿らない。淡々と事実だけを落していく。それがブランの役目。終わりを迎える命を刈り取る――死神としての存在理由なのだから。
瞼の裏に甦る刈り取った薔薇の記憶。産まれた瞬間の産声から歩んできた人生の道程。そして最後の瞬間、まだ死にたくないと歪ませたぐちゃぐちゃの泣き顔を最後にブツリと終わりを告げる。
痛みは感じない。苦しさも感じない。後悔も無い。唯ほんの少しだけ――心に虚無感が産まれる。それだけのこと。ブランは瞼を押し上げる。先程垣間見た薔薇の記憶を全て忘れぬように脳へと刻みながらまた歩き出そうとして、気紛れを犯す。
そう、それは本当に彼にとって気紛れだった。普段ならば気にも掛けない、最悪、踏み潰してしまう刈り取った薔薇の残骸。彼はそれを見つめたかと思うと、そっと屈みこんで拾い上げようとした。黒のマニュキアが塗られた指先が花弁に触れた瞬間、突如足元に現れた大きな落とし穴。ブランは抵抗する間もなくそのまま落ちていく。
驚きは一瞬。すぐさま体勢を整えて掴んでいた大鎌を使って空間を切り裂き、その先へと一歩足を踏み出せばそこには真っ白なベットの上で上半身を起こしている白に包まれた少女が一人。
絡んだ視線と間の抜けた彼女の驚きの顔。なによりも色濃く彼の視界を捉えるのは彼女が持つ死の刻印である薔薇の気配。
――あぁ、この命を今度は刈ることになるのか。そんな当たり前のことを彼は淡々と考えていた。

## 第三話　メメント・モリに慈愛の微笑みを

今日も変わらぬ始まりを告げる朝。いつものように真っ白の天井を見上げて目覚めたノワールはゆっくりと身体を起こし、息を吐く。生きている、その事実はいつだってノワールになにも与えない。いつか訪れる死を待つだけの生は諦めしか産み出さなかった。
そよぐ風が部屋の窓からするりと入りこみ、白いカーテンを揺らす。開けた覚えのない窓をノワールは不思議そうに見遣るも、すぐに納得したと頷きを落す。きっと看護師が来た時に換気目的で開かれたのだ。ふわり、優雅にターンを決めるかのように靡くカーテンは彼女の考えを肯定しているようで、少し笑った。
彼女の部屋は病棟の最上階である五階の一番奥に存在していた。しかし彼女以外に五階の病室を使う者はいない。五階は「メメント・モリ」発症病者専用の階であった。
現在は彼女以外の発症者はおらず、ただ一人だけの孤独感を常に味わうことに。しかしそれも産まれた時から、更に言えば家族が会いに来なくなったその瞬間からであるから、ノワールにとってはいつものことで済まされる。いや、いつものことで済まされていた、と今は言った方がいいかもしれない。

あの日、退屈だったノワールの眼の前に突如して現れた彼。その手には彼の背丈をも越すほどの大鎌が握られており、ノワールはまさか本当に死神が眼の前に現れたのだろうか、なんて思ったのも束の間。彼の手から消えてしまう大鎌。ノワールにとって瞬き一つの出来事。ではもう一度瞬きすると彼が消えてしまうのだろうか。それは――寂しい。

「ねぇ、貴方は、消えないで？」

無意識の内に零れた懇願は彼の耳に届いたのだろう。動くことの無かった表情が微かに動いた様な気がしたが、それすら気のせいと取れてしまうほどの一瞬で。彼もまた、瞬き一つで全てを隠してしまう。
絡み合った視線は解かれない。どちらかが逸らしてしまえば一瞬にして解けてしまうそれを二人は繋ぎあったままま、息を殺していた。言葉を発したその瞬間に全てが終わる。彼が消えるのか、彼女が消えるのか。はたまた――どちらも消えてしまうのか、どちらも残るのか。えも言われぬ緊張感が漂う中、動いたのは二人の唇ではなく、彼の右腕。
ゆっくりと持ちあげられたそれは、先程消したであろう大鎌を出現させていた。何故もう一度それを此処に現したのか。ノワールには彼の考えが読めない。ただ、消えてしまうという直感に心を寂しくさせていた。

「消えるの、ね。貴方も。」
「……。」
「仕方ないわよね。貴方だって、来たくて来たわけじゃないんでしょうし。」

「……。」

なにも答えない彼に苦笑い。それだけしか零れないノワールに対して彼は何も動かさない。その手に呼び戻した――彼女の眼にはそんな風に映ったのだ――大鎌を何に使うのかは分からないが、きっといるべき場所へと帰る為に使うのだろう。でなくば自身の命を奪う為に――と考えたところで首を横に振る。それは違う。それは今（…）じゃない。ノワールは不思議とそんなことを思った。
鈍く煌めく大鎌の刃が突如、空を切り裂いた。音も無く静かに、けれど、確かな振動を二人のいる空間に響かせて。ドクン、大きく鳴り響く心臓。ドクン、大きく脈打つ鼓動。ドクン、大きく突き動かされる、衝動。
ドクン、ドクン、ドクン。ノワールは胸元を握りしめる。鮮やかに咲いた薔薇の刻印が疼く。心臓に痛みはない。発作も起きていない。けれど、薔薇は静かに歓喜の声を上げていた。まるでこの瞬間を待ち望んでいたと謳うように。

「……また、独りぼっち、か。」

最初の独りは産まれた瞬間。次の独りは家族に見捨てられた瞬間。そして今度は眼の前の彼が消えてしまう瞬間。繰り返される独りぼっちに、ノワールはいつも通り微笑う。慣れているのだから問題ないと、諦めるのは楽だからと――ただ、微笑んで。

「独りは、嫌いなのか？」

唐突とも言える問いかけに、ノワールは瞬きを一つ。彼女に問いかけたのは誰？――なんて、聞かなくても解ること。眼の前の彼以外にこの場所にいて声を発せる存在はないのだ。彼は淡々とした声で繰り返し言葉を紡ぐ。――「独りは、嫌いなのか？」――感情が視えない瞳はノワールを突き刺すように鋭く、彼女の本音を引きずり出そうとしている。
ドクン、また、心臓が音を立てる。それは彼女の身体的な痛みか、精神的な予感か。ノワールは強く胸元を掴みながら震える唇を開いた。

「嫌いよ。独りは。だって……退屈、だもの。」
「退屈？」
「そう、退屈よ。退屈――だけじゃ、無いわね。」
「では他には何があるんだ？」
「……寂しい、かしら。」
「寂しい？」
「そう、寂しい。独りでいることの退屈には慣れてしまっているけど、寂しさには慣れないわ。だって、心が切なくなるもの。」

初対面の相手に建前ではなく本音を語ると言うことはノワールには初めての経験だ。これで伝わるだろうか。言葉は間違っていないだろうか。グルグル回る考えは沢山あるけれど、そんな考えは本音を前にすればシャボン玉のように簡単に消えてしまう。
気付けば彼にぶつけている言葉がある。それは彼女の隠していた本音だった。ただ、それだけなのだと後から気付いて恥ずかしくなることだけは、消えそうにはないが。
会話の流れとはいえ、誰にも言ったことのない本音を口にしてしまったノワールは、これ以上何も言いたくないと口を閉ざす。彼女の言葉を聞いた彼は何か思う所があったのか、視線を少しだけ下へと落す。
二人の間を奇妙な沈黙が漂う。じれったいとも言えるその沈黙を破ったのは第三者の足音。彼は視線を扉へと向け、ノワールもつられるようにそちらを見る。定期健診の時間が来たのだとぼんやりと考えて、次いで、彼を早く逃がしてあげないと、と思う。此処は医師の許可無く足を踏み入れられる場所ではない。そして易々と不法侵入できる場所でもないのだ。
ノワールは近づく足音のカウントダウンに今更ながら慌てて彼へと言葉を投げる。

「早く、早く帰った方がいいわ。」
「……何故？」
「何故、って、だって貴方、このままじゃ不法侵入者として捕まってしまうわよ？そんなの、望んでないんでしょ？」
「――お前は？」
「え？」
「お前は、どうなんだ？

――此処に居る事を、望んでいるのか？」

目を強く見開いた。喘ぐように口も開かれた。けれど――。

「望む望まざるに関わらず、私は此処にしか、居場所がないのよ。」

ノワールはいつも通り微笑むのだ。それ以外の答えは存在しないのだと言外に語りながら。
彼からすればそれは諦めに過ぎないのかもしれない。望めば此処から出ることは出来たのかもしれない。だけど、此処を出たとしてノワールには行き場所がない。既に家族との縁は切れている。親戚など顔も知らない。それ以前の問題でノワールはこの空間だけしか知らないのだ。四角く

切り取られたような真っ白な病室。そこだけが、唯一ノワールを受け入れてくれる場所だったのだ。

「私のことはいいから、早く行って。でないと本当に捕まってしまうわ。」
「……。」
「さぁ、早く。時間を稼いであげたくても私にはどうしようも、「また、」……？」

迫りくる足音に対して動こうとしない彼にじれったさを感じながら早く早くと願うように重ねていた言葉を遮られる。ノワールは訝しむように顔を顰めるが、次の瞬間にはその表情はまた、驚きを一面に広げるのだ。

「また、此処に来る。そうすれば、お前は独りじゃない。俺とお前で、二人になる。」

そう言い残して彼は切り裂いた空間の隙間から姿を消した。残されたのはベットの上に身体を起こしている状態のノワールただ一人。彼女は彼がいた場所を見つめながら、扉の開く音をどこか遠くで聞いていた。

彼がいなくなった後、ノワールは医師の定期健診を受けて、いつものように残りの一日を夜の帳が下りるまでその部屋で過ごした。眠る為に布団の中へ潜り込んだけれど、一向に眠気は訪れない。ドキドキと脈打つ心臓が興奮を呼んでいるのか、逆に眼が冴えてしまう一方だ。落ち付く為にと水差しから冷たい水をコップに注いで飲んではみたものの、焼け石に水と言わんばかりに逆効果。結局、眠れたのは朝方になってから。それまではずっと彼の言葉を脳内で反芻していた。

「また、此処に来る。そうすれば、お前は独りじゃない。俺とお前で、二人になる。」

本当に彼は来るのだろうか。もしかしたらその言葉は慰めで、嘘の約束なんじゃないだろうか。いや、きっと来る。来ると信じていいはずだ。侃々諤々と沢山の声が脳裏に響く。全てノワールの声であり、本音であり――弱音でもあった。
信じたいと思いながら疑って、疑いながらも本当は信じたいのだと訴える。どちらも本音だから始末に悪いのに、彼女の弱音が――独りぼっちは、嫌だよ――強く顔を出してしまうのだからさらに性質が悪い。

零れる溜息。堂々巡りの思考回路。夢に魘されてしまいそうだ、なんて苦く笑って。結局、彼女は全ての本音を肯定し、全ての本音を否定した。ただ、弱音についてだけはこっそりと蓋をする。今はまだ、受け入れられないから、もう少しだけ隠れていてね、と願って。

結論を言えば彼はやってきた。あの時と同じように空間を切り裂いて突如として彼女の前に現れたのだ。しかしそれをノワールは視認していない。視認出来る状態ではなかった。何故なら彼女は眠っていたからだ。彼の言葉に振り回されて朝方まで寝つけずにいたおかげで、と注釈が余談で付いてくる。
ノワールが彼を見ることが出来たのは眠りから覚めた昼頃。それまで彼はずっと彼女の寝顔を見つめていた。表情を動かすことなく無表情のままで。それを見とめた彼女が叫び声をあげなかったことは心から褒めて欲しいと思っても仕方ないだろう。
なにはともあれ彼はちゃんと口にした言葉通りノワールの前にやってきた。最初はただ傍に居るだけ。どちらも口を開かずだんまり状態。徐々にそれにも慣れてくるとノワールが言葉を零し、彼が黙って聞いてたり、稀に口を開いたり。
帰る瞬間も様々だ。医師の定期健診が来た時や、ノワールが眠くなってしまった時。彼が無言で立ち去る時もあった。その際に必ず二人は「また、」と次の約束を交わす。それはどんなに遅くなっても叶えられる約束だった。
彼は何度もノワールの前に現れる。最初の別れの言葉通り、ノワールを独りにするのではなく、二人になる為に。
ノワールはそんな彼の気遣いがとても嬉しくて、幸せだった。いつか訪れるであろう別れを自覚しながらも、それが少しでも遠くなればいいと叶わぬ願いを抱くほどに。

今日もまた彼に会えるのだろうか、とノワールは彼の訪れを待つ。会ったら話したいことが沢山ある。今日視た夢のこと、昨日見た夕焼け空の色、読み返してみた本の話、それ以外にも沢山のことを、ノワールは彼と語ることを酷く楽しみにしていた。
そしてそれは時を待たずに叶えられることになる。

「いらっしゃい。ブラン。」
「……あぁ。元気だったか？ノワール。」

音も無く切り裂かれる空間。割れた裂け目から現れるのは待ち遠しく感じている彼で。ノワールは嬉しそうに微笑みを湛えて彼を歓迎するのだ。

## 第四話　メメント・モリに残酷な口付けを

時折そよぐ風に身を任せて揺れる薔薇の花弁。ふわりと鼻を擽る香りはまるで生を喜ぶかのように軽やかだ。しかし、中にはその香りが薄いものもある。そういったものは大抵が寿命の終わりが近い薔薇だ。ブランはそれらを嗅ぎ分け、見分け、己の役目を果たす。しかし、普段通りの行動をブランは取れずにいた。
眼の前には一輪の薔薇。瑞々しさを未だ失わないそれは生命力に溢れている――様に見える。しかし実際は辛うじて残っている命を繋ぎとめようと必死なのだ。その証拠に周りに咲いている薔薇とは違い、眼の前の薔薇は与えられた唯一の赫を脱ぎ捨てた様に真っ白で。

まるで、彼女の纏う白（…）のように見える。

そっと伸ばした指先。壊さないように、汚さないようにと優しく花弁を撫でる。伝わるのは冷たさだけ。温度は感じない。例えこれが魂であったとしても温もりを感じないのはどこか――哀しい。
ブランはそんなことを考える自分に驚いた。感情そのものが欠落していると言っていい程、ブランは何かに心動かされることはない。産まれ落ちたその瞬間に与えられた神の使命を全うする。ただ、それだけの為に生きている。これからも、終わることなく永遠に。
しかしそれは覆される。彼女に出会い、彼女の微笑みを見た、あの瞬間から。

「……また、独りぼっち、か。」

「独りでいることの退屈には慣れてしまっているけど、寂しさには慣れないわ。だって、心が切なくなるもの。」

「望む望まざるに関わらず、私は此処にしか、居場所がないのよ。」

グルグルと繰り返し再生される彼女の言葉。柔らかに優しく届くその声は深く聞けば聞くほど全てを諦めてしまっていることが解る。
ブランは沢山の人間の声を聞いてきた。欲望に濡れた声、感謝を湛えた声、痛みに苦しむ声、後悔を零す声――死を迎える瞬間の、人間の本音を沢山その脳に刻んできている。彼女の声は彼が聞いてきた声の中でも一番柔らかで優しすぎた。それは全てを受け入れているということに他ならない。
全てを受け入れて――彼女は諦めてしまった。足掻くことをせず、ただあるがままそれを受け入れて、反論も拒絶もしない。いつか来ると解っている死を待っているだけ。そんな人間を見たこ

とが無い、とは言わない。過去を遡ればそんな人間もいることはいたのだ。
しかし、本当に死を眼の前にすれば本心が顔に現れる。特にブラン自らその魂を奪いに来たと解ればなおさらのこと。みっともなく取り乱し、死にたくないとそれだけを繰り返し叫ぶ。
彼女もそうなるのだろうかと想像してみても、一向にそんな想像は形を生み出さない。寧ろ、最後まで微笑んで逝くのだろうと想像したほうが容易い。実際、彼女自身もそう想っているのだろう。浮かべられる微笑みは何度見ても諦めしか滲ませない。だから、あんなことを口にしてしまったのか。

「また此処に来る、などと……愚かな事を。」

いつかは行かなければならない。彼女の胸に咲く薔薇を刈り取りに。それは遠い未来ではなく、近い現実だ。そうと知っていて何故、自分はあんなことを口にしたのだろうか。あの言葉では使命を全うする為ではなく、彼女自身に会いに行くと言ったも同然だ。事実、彼女とてそう受け取ったのだろう。最後に見た表情は酷く驚いていて。――それに、安堵してしまった自分は一体何なのか。
彼女があんな微笑みを浮かべなかったから？本音が諦めすら含まないただの驚きへと変わったから？それとも、自分が会いに行くと言ったことに心を動かしてもらえたから？――脳裏を勢いよく駆け巡り掻き回す疑問は答えを何処かへ置き忘れてきてしまったようだ。必要ない悩みを抱え、頭痛を引き起こしかねないそれをブランは首を横に振ることで一蹴した……つもりだった。

「どうして、消えない？」

呟いたそれは心底困惑していることを露わにし、また、そんな感情に振り回されている自分への驚きも示す。ブランはもやもやする心臓に顔を顰め、再度頭を振っては思考を切り替えようとするのだが、上手くいかない。初めての経験とも言えるそれにだんだんと苛立ちを募らせ、いっそ眼の前の薔薇を握りつぶしてしまおうかと考える。そうすればこの困惑からも、苛立ちからも、彼女自身からも解放されるのだから。
自然と細められた瞳は感情を消していく。触れている指先に少しずつ力がこもっていく。そうと知らずに未だ懸命に生きようとしている薔薇は彼からすれば滑稽に映ったことだろう。そんな薔薇を一輪摘み取ったところで誰も気にはしない。いつか死ぬと解っている命が、故意とはいえ早急に刈り取られるというだけなのだから。
予め定められた余命の時ではない薔薇を摘み取るのはさらに罪を重ねる行為だとブランは理解していた。しかし、贖いはいつも通りの記憶になるだろうと予測する。そして変わらぬ生を重ねるだけの人形として使命に埋もれていく未来は彼にとって予め用意されていた道筋であり当たり前のことだから問題はない。
ただ、この命が理不尽に奪われる、それだけの話――。

「なのに、どうして苦しい？」

込めた力は全て指先から抜け落ち、握り潰される筈の薔薇は未だその生命力を維持しようと必死だ。穢れを知らぬまま育った白はブランに只管苦しみだけを与え続けている。理由も解らず、理解することもできないその苦しみをどうにかしようと彼が取った行動は、ある意味で正しくも間違いであり、ある意味で後戻りできない道へ入りこんでしまっただけなのかもしれない。
振り上げた大鎌が悲鳴を上げるように音を立て、空間を切り裂いた。裂け目は徐々に広がり、向こう側に広がる世界を映し出す。最初に眼に飛び込んでくるのは白。一面に広がる真っ白は、配置されている家具類も同様のようで。唯一別の色を持つ透明の窓とそれを支えるサッシの銀が寂しげに存在を主張する。他に色は無いのだろうかと視線を巡らせれば、本棚に納められた沢山の本の背表紙がカラフルに並んでいた。
余分なモノが一切置かれていない、シンプルな部屋――病室としては正しいのだろうが――は冷たさと寂しさをブランに切々と訴えていて。あの日彼女が告げた言葉の意味が此処に繋がるのなら、それはどれだけの苦痛なのだろう。
想像しようとして、止める。そんなことを考える為にブランは此処へ足を運んだんじゃない。抱えた苦しみをどうにかするためであり、想像して更に苦しみを増やしてしまうのは本末転倒というものだ。
ブランは裂け目の向こう側へと一歩足を踏み出す。地面にしっかりと足がつき、そのまま身体を滑らせるように部屋の中へと乗り込めば、背後の裂け目は一瞬にして消えてしまう。泡沫のように呆気なく、見間違いかと納得しまうほどにあっさりと。
それに視線をやることなくブランは片手の大鎌を消す。これもあっさりと。何処へ消えてしまったのかはブランにしか解らない。なにも知らない子供が見れば手品だと大はしゃぎ、大人は疑いに掛かるか子供同様に騙されるか――とは、余談である。

「……寝ているのか？」

ベットの上、静かな寝息を立てる彼女の顔の傍に近寄って、影を作りながら覗き込んだ。昨日見た時と変わらない白い肌、白い髪、白いパジャマ。彼女のいる空間は全て白に染まっている。まるで、切り離された世界。隔離された白の世界のようだ。

そんな中で彼女はいつまでも独り、終わりが来るのをただ待っているのか――。

ゾッとするほど溢れる不快感に眉を寄せる。苦しみは消えない。寧ろ増えていくばかりで止まってくれない。消し去りたくて此処に来たのに、どうして消えてくれない。ブランは胸元を掻き毟るように掴みながら、眠る彼女を睨みつける。瞳は縋るように不安定に揺れていて、途方に暮れる子供のよう。

ふと、彼女の表情が崩れた。安らかな眠りを湛えたそれが苦しみに歪んでいく。そろりと動いた彼女の右手か胸元に咲く薔薇の刻印に触れた。

「……っ…ぁ、う……ッ……。」

喘ぐように震えた唇から零れる声は痛みを訴える。必死に堪えようとしているのか、右手はいつの間にか強く握りしめられ、唇も強く噛みしめられた。ブランは眼の前の光景に一瞬混乱してしまう。いつもなら見慣れたその光景も、彼女を通してしまうと初めて見る光景にすり替わってしまうようだ。
きつく閉ざされた柔らかな瞼。するりと零れる涙にブランは無意識の内で手を伸ばし、そっと拭う。ピクリ、震えた頬。彼の手も同様に硬直するが、すぐにそれは解かれた。彼女がブランの手にすり寄るように頬を擦りつけたのだ。そこから伝わる温もりにブランは安堵する。安堵して――思考が停止する。
未だ痛みに喘いでいる彼女を救ってやれもしない中で感じた温もりに安堵するなんて、自分は一体どうしたのか。そもそもこんな感情に振り回されるような、人間の様な存在じゃない筈だ。
困惑するブランの思考回路。グルグル駆け巡る疑問の羅列。答えは彼の中に無くて。どうしたらいいのか、解らない。消えない苦しみは最高潮に達し、ブランは彼女から顔を逸らして俯かせた。

「……じょう、ぶ。」

小さく掠れた声が部屋の中に落ちる。痛みの混じる声だが、それは確かに言葉を並べていて。ブランは咄嗟に彼女へと視線を戻した。その先には瞼をこじ開け、ぼやけているであろう視界で彼を見つめる彼女。湛える微笑みは柔らかく、優しく――全てを許しているようで。ブランは何故かとても、泣きたくなった。

「大、丈夫、よ。」

たった一言。それを口にするだけでも体力を消費するだろうに、彼女は只管同じ言葉を繰り返す。崩れぬ微笑みとともに、ブランの抱えた苦しみを癒そうとするかのように。
彼女の右手が震えながらもブランへと伸ばされる。そして彼の頬へと触れた指先。そっと、目尻を拭うように滑ったそれはあまりにも冷たく、彼女の命の灯の儚さを教えてくれる。

「大丈夫、だか、ら……泣かない、で？」

ぱたり、重力に従って落ちる指先。閉ざされた瞼は開かれること無く意識を闇の中へと引きずり込んだ。ブランは彼女の言葉の意味を理解できなかった。泣いている自覚はない。実際にも泣いていない。でも彼女には自分が泣いているように見えた。それは、何故？
問う為の言葉は彼女には届かない。何故なら彼女の命はもう――残り僅か。死神としての役目を果たせと魂は訴える。しかしそれを振り払うようにブランは首を横に振る。こんな形で終わらせるなんて嫌だと、我儘を言うのはブランの初めて抱いた本音であり、幼子の感情。

「此処に、また来ると言った。その時に俺と彼女で二人になるとも。それを果たすまでは――刈り取らない。」

死神としての役目に逆らう為の引き金は彼自身の決意を持って引かれた。後はその心に従うだけ。ブランは彼女のパジャマのボタンを上から一つ、二つと外していく。全てを外すわけではなく、胸元がはだける程度まで。そっと傷つけないようにと前を広げられた其処に広がる白は、侵蝕される赫い薔薇の刻印によって穢されていた。
これからすることは死神としては最大の禁忌だ。故意に命を刈り取るのではなく、故意に命を長らえさせる。それは死神としての存在理由に反した行為。神から直接してはならないと言われた禁忌だ。
ブランはそれを今から行う。禁忌を犯す恐怖はないが、成功するかどうか解らない術を取ることに対する恐怖はある。彼は初めてこんな恐怖を抱いた。過去の自分が知ったらあり得ないと即答するであろうこの感情。彼女に出会って初めて得られた――彼だけの、モノ。

「失くすつもりも、亡くすつもりも、ない。――お前を独りには、絶対にしない。」

彼女の顔の両脇に両手を突き、彼女の上へと覆い被さった。負荷の掛かる二人の体重にギシリと悲鳴を上げたベッド。彼女の表情は動かない。変わらない。ただ、刻一刻と命は削られていく。
ゆっくりと顔を下していくブラン。彼の唇が触れる先は胸元に咲く薔薇の刻印。それを通して彼は命を送り込むのだ。自身の魂を削り、産み出した命の塊を。
その光景はまるで聖母の胸元に口付ける幼子のように神秘を纏い、誰にも犯せない領域を築き上げていた。幸いにもその光景を眼にする者は誰もいない。いないからこそ荘厳なままに粛々と禁忌は終える。
唇をそっと離し、ブランは彼女の胸元から顔をあげた。ほんのりと力を帯びた刻印は静かに鳴動している。彼はゆっくりと身体を起こし、彼女の顔を覗き込む。青白く、今にも死に絶えてしまいそうな頬に僅かではあるが赤みが差していた。そっと彼女の唇へと手を翳せばか細いながらも息はしている。これから徐々に落ち着いたものへと変わっていくだろう。どうやらブランの犯した禁忌は無事に成功したようだ。
ホッと安堵の溜息を零す。肌蹴たパジャマのボタンを元通りにし、少しだけ彼女から距離を置くように離れた。唯一歩、後ろに下がっただけ。そうして彼女の全てを見遣る彼の瞳は酷く穏や

かだ。

「早く、目覚めるといい。ちゃんと約束を果たしに来たから。」

離れた一歩を詰めて、伸ばした手。触れた彼女の温もりはほんのりと暖かく、ブランの口元に笑みを刻ませた。きっと目覚めた彼女は全てを忘れているだろう。元々痛みに意識が混濁していたのだ。覚えている筈がないし、それは当たり前のことである。
それがほんの少しだけ寂しいだなんて考えてしまう。彼の中に訪れた変化は、彼に一つの色を与えたようだ。――優しくも哀しい、白という彼女の色を。

## 第五話　笑みを零した白の少女はそう願い（前編）

寒い冬空の下、夜の静寂を突き破る産声が一つ生まれた。オギャアオギャアと甲高い声は可愛らしい女の子のもので、命を掛けて産み落とした我が子を助産婦の手によって渡された女性は涙を目尻に浮かべながら抱きしめた。掠れた溜息は喜びの吐息となって唇からゆっくりと吐き出される。

「ありがとう、私達の元に産まれてきてくれて。」

愛しいという感情を込めた一言が赤ん坊へと向けられた。未だ泣きやまない赤ん坊を慰めるように震える手でそっと頬を撫でる。出産に立ち会っていた彼女の夫と見られる男性も傍により、妻と産まれてきた子に「ありがとう、ありがとう。」と何度も感謝の言葉を繰り返す。たった二人の家族に子供という家族が一人増えたのだ。今日は目出度い日となる――――はずだった。
赤ん坊が包まれた産着から覗く一輪の薔薇。最初見た時は存在しなかったそれは、徐々に浮き彫りになって現れたのだろう。視認するには薄い線でしかなく、けれど、徐々に刻印の様に深く刻まれたそれに代わっていくのに時間は掛からなかった。

「あ、あ、あぁ……。」

第一発見者は母親。もっとよく顔を見ようと疲れ切った身体に鞭打つ形で我が子を傍へと引き寄せた際に、僅かに肌蹴た産着。その奥の軟い胸肌に薄らと滲んだ線を訝しむように見遣ったその時――薄かったそれが濃いものへと変化していく瞬間をまざまざとその眼に映してしまったのだ。喜びは一瞬で絶望へと塗り替えられた。震える指先が我が子の胸に触れては刻まれた線をなぞる。これは私の見間違いで、本当はもっと別の痣だったとかそんなものなのでは、なんて期待は早々に崩れてしまう。どれだけ指を滑らそうと擦ろうと、その線は消えず、寧ろより一層に明確になってしまった。妻の行動に疑問を持った夫も覗き込むようにして赤ん坊の胸元を見て息を呑んだのだ。見間違いでも見当違いでもなく、ましてや、夢なんかでもない。――ちゃんとした、現実だ。

「―――いやぁぁぁぁあぁぁぁぁ！！」

室内に響き渡る母親の絶叫。父親は咄嗟に妻を抱きしめて落ち着かせようとする。驚きと混乱に見舞われる助産婦達は「落ち着いてください！！」と声を掛けながら赤ん坊を彼女の傍から引き離す。何も知らず抱きかかえられた赤ん坊は肌で感じた雰囲気に怯えてまた泣き喚く。

――これが後に「メメント・モリ」発症者として認知される少女の誕生であった。

テレビのチャンネルを変更した様に、一瞬にして場面は切り替わる。

幼い少女が一人、心細げに病院内を彷徨っている。背格好からして６歳くらいだろうか。腕に抱えた一冊の絵本をギュッと抱きしめて離さないその様は縋る物がそれしかないと言わんばかりだ。実際少女の傍に誰かいるわけでもなく、また、彼女のいる廊下に人影が一つも存在しない為、手すりや壁に縋る以外には少女の腕の中に納まっている本を抱きしめるしかないのだが。
今日は少女の両親が二人揃って会いに来てくれる日であった。父親の仕事が忙しく、滅多に顔を出してもらえないのだが、代わりに母親が毎日顔を出してくれているので寂しくはない。だが、やはり父親にも会いたいという気持ちはあって、何度となく母親に父親にも会いたいと強請り続けていたのだ。それがようやく叶うと知った時の少女の喜びは想像に難くないだろう。そして迎えた当日なのだが、病室で待っても来てくれず、また、会いに来ると言ってくれた時間を過ぎても現れない両親の姿に不安を覚えて少女は病室を抜け出したのだ。迷路のような複雑な作りになっていないことから自身の病室から抜け出しても迷いはしないと、幼いながらに判断した結果である。しかし一人で両親を探し彷徨うのは恐かったのか、丁度室内で読んでいた絵本を御供にしている所はやはりまだまだ幼い子供なのだと印象付けた。
真っ白な廊下に響き渡る少女のスリッパの音が耳に痛い。今聞きたいのはそんな音ではなく、両親の声だ。もしかして部屋を間違えているのでは、と先程から間隔を置いて設置されている病室の扉の向こうを一つ一つ覗き込んでいるのだが、生まれた時から病室でずっと育ってきた少女の部屋を今更間違える両親ではない。そう解っていながらも一縷の望みを掛けて恐る恐る室内を伺うのだ。
だが、どれだけの部屋を覗こうと両親の影は愚か、他の病人の姿も看護婦、医師の姿も見つからない。シンとした空気が流れる病棟に少女の心細さはより一層深まり、絵本を抱きしめる腕に更に力が込められた、その瞬間だった。

「どう…て、……なこと……。」
「……な…を言……。」

途切れ途切れながらも聞き慣れた声が二つ、少女の耳にするりと入りこんできた。これは両親の声だ。先程までの心細さが一転、歓喜に満ちた感情へと代わって少女に笑みをもたらすのは呆気ないほどに簡単に行われた。少女は両親の傍へと近づこうと掛け足で動き出すのだが、その足は早々に立ち止まってしまう。
両親がいるその場所は一つの階に一列に連なる病室を半分に切り分けては繋ぎの役目を担っている中央の空間で、病棟を移動する為のエレベーターが設置されている場所でもあった。同時にそこは見舞客や親族達が休息する休憩の場でもあり、二人は窓際に設置されている横長のソファに腰掛けている。

視線の先には確かに両親が二人いる。だが、話をしている二人の前に自分が顔を出していいと言えるような雰囲気ではないことを無意識に感じてか、思わず二人から姿を隠せる場所を探しては視線を右へ左へと忙しなく動かし、ようやく見つけた隠れ場所――大きな葉を茂らせた観葉植物の陰へと隠れた。距離としては先程よりも両親の傍へと近づく結果になったが、音をたてないようにとスリッパを脱いで恐る恐る近づいたからか、両親は少女の存在に気付くことは無かった。

「あの子が生まれてから、ずっと祈ってきたわ。神様、あの子を救ってくださいって。でも神様は救ってなんてくださらない。それどころか日に日にあの子の病気を進行させていくばかり。医者だって治りはしない事を解っていながら「どうか気を強く持ってください、私達も全力を尽くしますから。」なんて私達に平気で嘘を吐くのよ。」
「彼らの言葉に嘘は無い。ただ、全力を尽くしてもどうにもならないことはあると暗に伝えているだけだ。特に、あの子が患った病気に関しては匙を投げられても仕方ないものなんだ。」
「そうだとしても、もっと言い方があるわ！！なんだってあんな、あんな……っ……あぁ、もう、私耐えられないわ。どうしてこんな思いをしないといけないの？」
「お前が一番にそんな事を言ってどうする。一番辛いのはあの子なんだぞ？」
「解ってる。解ってるわ。だけど辛いのはあの子だけじゃないのよ。治る見込みのない病気を抱えた娘を育てる私だって、同じくらい辛いの！！」
「だからと言って、なにもこんな場所で言葉にしなくていいだろう。今日はあの子に会いに来たんだ。早く行ってやらないと心配させてしまう。それに、辛いのは君だけじゃない。私だって辛いんだ。あの子に何もしてやれない、私だって……いい加減、解ってくれ！！」

誰もいないその場所の会話を誰も聞いていないと思っている両親の会話はだんだんとエスカレートしていく。やるせない思いを吐き出していた筈の母親は自身の苦しみを訴え出し、それを諌めていた父親は徐々に苛立ちを露わにしていく。
どちらも少女の為にと出来る限りの事をしているのに、報われない無情な現実に押しつぶされているのだ。少女は自分の所為で喧嘩になろうとしている会話を止めようと咄嗟に身体を動かすのだが、またもその身体は唐突に止まった。

「解れ？解れですって？どの口がそんな事を言うのかしら。貴方はいつだってあの子の心配してるフリしてるだけじゃない！！あの子の世話を私に押し付けっぱなしで、貴方があの子の為に何をしてくれたっていうの！？」
「なっ……！！私は、あの子の治療費や君との生活費を稼ぐためにいつも頑張っているんだぞ。何もしていないだなんて言われる筋合いはないし、そういう君の方があの子に何をしてやれていると言うんだ！？家に帰ってあの子に関する愚痴ばかり聞かされる身にもなってくれ！！」
「……っ！！……どうして、どうして私が貴方にそんな事言われなきゃいけないの！？今まで私が、私は……っ……！！」

「こんな、こんな思いをするくらいなら、あの子なんて産まなきゃよかった！！」

響き渡る母親の絶叫。先の見えない少女の看病に疲れ切った母親のひた隠しにされた本音がそこには込められていた。少女はその声をじかに耳に入れてしまう。動かない身体から血の気が全て引いたような、ひやりとした感触を背中に感じては一歩、また一歩と後ずさる。そしてそのまま少女は踵を返して走り出した。自分が病人であるという事などあっさりと忘れ去って身体を酷使した先に辿りついたのは少女の自室――とも言える病室の中だ。
全力で走り去るなんて初めての経験をした少女は荒い息を吐き出しながら、血が喉をせり上がって口内に広がる様な気持ち悪さに酔っていた。何度も咳込みつつ、備え付けの水差しからコップに水を注ぎ、息が整った頃を見計らって少しずつ水分を補給する。気持ち悪い感触をそのまま喉奥へと押し込めるように、何度も何度も繰り返し水を飲んだ。コップに注いだそれが無くなる頃にはどうにかこうにか気分も落ち着き、少女は深く、深く息を吐き出した。
腕に抱えていた絵本をベットの上に置いて、自身もベットの上に座り込んだなら、ぼんやりと天井を見上げる。シミ一つない真っ白な天井は、少女が物心ついた時からずっと見つめてきた光景の一つだ。朝起きてから夜寝る時まで。一年中見上げ続けるその色が、じんわりと滲んで歪む。

「大丈夫。」

少女は一言呟いた。小さな、か細い声でたった一言だけを。

「大丈夫、私は、大丈夫。」

ベットの上を彷徨った両手が触れた絵本を胸元へと手繰り寄せ、ギュッと抱きしめる。見上げていた視線は自然と下へと向けられて、ほろり、一粒の涙が落ちた。それを合図に堰を切ったかのように溢れては零れていく涙達。堪える術を持たぬ少女はせめて声だけでも、としゃくりあげる喉を懸命に押し殺し、強く唇を噛み締めていた。
ほろり、ほろり、零れる涙は少女が抱きしめる絵本の表紙も濡らしていく。大きな文字で描かれた絵本のタイトル「忘れられた祈り」という文字が涙の痕を受け入れるように滲みこんでいく。それに気付いた少女が震える手で何度も何度も涙の痕を拭っていた。

「ごめんね、濡らして、ごめんね。」

少女は繰り返し絵本に謝罪する。寂しい少女の心をいつだって慰めてくれていたのはこの絵本だ。初めての両親からの誕生日プレゼント。色褪せ、黄ばんでも捨てる事だけは絶対に許さず、春夏秋冬いつだって少女の傍にいた親友のような存在。そんな大事な絵本だからこそ大切にしていたのに、自分の涙で濡らしてしまうなんて、少女はとても悲しかった。

「ごめんね。すぐ、泣きやむから、本当に、ごめんね。」

片手で自身の両目から零れる涙を拭い、もう片方の手で本に零れた涙を拭う。幼い少女の拙い動きは誰に見られることなくひっそりと行われていた。

（あぁ、覚えている。これは私の幼い頃の記憶だわ。）

赤ん坊が産まれた瞬間を、少女が病室で泣く姿をノワールは見えない透明の壁越しにずっと見つめ続けていた。
最初から明確な意識を持って見ていたわけではない。水面に波紋を描くようにゆらりと揺蕩う意識でしかなかった。だが記憶が鮮明に蘇る度、ノワールの意識はハッキリと人格化されていく。そして少女の母親――厳密にはノワールの母親だが――が叫んだ一言を皮切りにノワールは己を取り戻したのだ。
これはノワールの記憶を元にした夢だ。そう判断するのに時間は掛からなかった。何故ならノワールがノワールとして意識を覚醒させた時には既に少女は走りだしており、両親の行動を見遣ろうにも視点は少女の視点そのものだったのだ。実際にあの一言を聞いた後の両親の行動をノワールは見ていない。だから記憶にないものは夢の中で再生されなかった。そういう事だろうと勝手ながらにノワールは解釈している。
そして夢と判断したのはノワール自身が眠りについた事を覚えているからだ。いつものように病室で目覚め、定期健診を受けた後、タイミングよく現れたブランと時間が許す限り会話を重ね、別れ、そのまま眠りについた。それから先は目覚めた覚えが無く、今この瞬間を目覚めとするのなら、眼の前の光景を現と取るにはあまりにも身に覚えがあり過ぎた。

「夢、に視るほど私は過去を恋しがったつもりはないんだけどね。」

未だ泣きやまない少女の姿から視線を逸らし、俯いたその時だ。ノワールの眼の前にあった壁が音を立てて崩れ去り、真っ白な病室という名の空間もあっさりと崩壊の一途を辿る。咄嗟にノワールは少女へと――過去の己へと手を伸ばすけれど、少女はノワールが伸ばした手に気付くことなく、大事な絵本と共にその姿を消した。

「ごめんなさい、」

消える瞬間、少女が紡いだ最後の謝罪の言葉が耳から離れない。ノワールは悔いるように、懺悔するように何も掴めなかった己の手を強く握りしめて、急落下する衝撃に耐えきれず取り戻した意識を手放した。

## 第五話　笑みを零した白の少女はそう願い（中編）

鼻先を擽る芳しい香りにノワールは眼を醒ました。震える瞼を抉じ開けて、霞がかった思考をどうにかこうにか働かせる。ここは何処だろうか。両眼に映る天井はいつも自分を歓迎していた白の天井ではなく満天の星空。一体いつの間に自分は外へと足を踏み出していたのだろうか。未だに微睡む意識がゆらりと揺れて、ふわり、そよぐ風が優しく完全な意識の覚醒を促してくれる。瞬きを一つ、二つ。頬を撫でる草の感触、普段触れない地面という名の土の感触にノワールは一気に身体を引き起こし、辺りを見回した。

「ーーー夢の中、よね？」

視界一面に広がる薔薇の園。蕾を膨らませていたり、開花しては魅惑的な赫色を誇っていたり、花弁を一枚一枚枯らせていたりとその姿は様々だ。ノワールを目覚めさせた香りはこの薔薇の芳香と言って差し支えないだろう。密集しては咲き誇る薔薇の数々にノワールは先程まで自分が見ていた、生きていた世界こそが夢で、「今」というこの場所が現実なのだろうか、と頭を混乱させる。それほどまでにノワールが触れるもの、感じるもの全てから命の息吹を感じられるのだ。本能的にそれが恐いと感じるのは可笑しなことなのだろう。ノワールはそう思ったが、一概にもその恐怖を可笑しいと断言できはしないという事に、今は気付かないまま。知るのはまだ、先の話だ。
両手を地面についてゆっくりと立ち上がる。地面を踏みしめる素足の感触に奇妙な感動を覚えながらも歩き出す。リノリウムの床とはまた違った冷たさはノワールの心に「生」を感じさせた。そして余計に本当はこちらが「現」なのでは、と勘違いを巻き起こす。寧ろそうであれば、なんて、夢にも似た想いを描き一一我に返っては自嘲する。

「やっぱり、こちらが夢なのね。こんな叶わぬ現を想うくらいなんだもの。」

一生を病室で過ごし、息を引き取るのだと解っている。産まれた時から、物心ついた時から言われ続けた余命幾許かの話はノワールに諦めの種を早々に植え付けた。医師や看護師達の物言わぬ同情が種に水を差し、母親の本音が蕾を芽吹かせ、刻一刻と迫る死のカウントダウンがそれを開花させる。
ノワールの傍には「生」はなく、「死」が纏わりついていた。そしてそれこそがノワールの「生」なのだ。一生を四角く切り取った病室の中で過ごし、触れるもの全てが無機質な冷たさである筈の「現」。にもかかわらず今現在の彼女は大地に足を付けて歩いている。これを「夢」と言わずしてなんと言おうか。やはり最初の混乱はあり得ないほど現実味を感じさせるこの「夢」に願望を抱いてしまったが故の勘違いなのだ。行きついた答えにノワールはゆるりと微笑む。いつものように、慣れきったその微笑みは諦めを当たり前とした彼女の全てだった。

「それにしても、凄い数の薔薇ね。一面見渡せど薔薇しか存在しないなんて……。こんな夢を見てしまうほど私は薔薇に恋焦がれていたのかしら？」

右を見ても左を見ても薔薇、薔薇、薔薇。姿は様々ながらも色は赫一色。まるで彼女の胸元に咲く薔薇のようだ。産まれた時から共に育ってきた薔薇とは言え、夢見るほどに恋焦がれる理由などありはしない。この花はいつだってノワールを苦しめ、諦めの淵へと追いやってきたのだから。
自然と右手が胸元の服を握りしめる。潰せるものなら刻印の薔薇すら握り潰してしまいたいと言わんばかりの動作は無意識の行動だ。布を捩じる様に指先に力を込めてようやくそれに気付いたノワールの眼の前を、強い突風が体当たりするように通り過ぎていく。
咄嗟に息を飲んで両腕で顔を覆い隠して足を踏ん張った。力強い風に対抗するにはノワールの体力は貧弱すぎて、足は風に押されるまま後ずさっては踏鞴を踏む。それでもこけずに立っていられたのは重畳というものだ。
風に乗った薔薇の香りが辺り一面に噎せ返る。元々強い芳香だったが、更にそれは強調されたようで少しばかり息苦しい。咳込みそうになる口元に右手を当てて、突風が迫ってきた方へと改めて視線を向ける。そこには先程とは違う光景が広がっていた。
人影など一つも見当たらなかったのに、いつの間に現れたのか全身を白い布で覆った人が咲き誇る薔薇の群れの中にぽつんと立っていたのだ。ノワールに対して背を向ける形のその人は頭上を見上げているのか、頭が僅かに仰け反っている。しかしその頭すらも白い布で覆われている為、もしかしたら人ではなく別の存在なのかもしれない。
どちらにしても折角会えた存在だ。声を掛けて交流するのも有りだろう。現実だったのならば不審者としても見て取れるそれに警戒を隠さず、そのまま気付かれないように踵を返すところだが、これはノワールの夢の中。多少危険な目にあったとしても、現実に影響はないだろうと楽観視してしまう。要するに唯の好奇心だったりする。

「こんにちは……じゃなくて、こんばんは、かしら？」

穏やかなノワールの声は無事に届いたのだろう。するり、衣擦れの音を立てながら振り返る白い布は真正面から見てようやく人だと確信が持てた。顔まですっぽりと白いそれで隠されているのだが、僅かに覗く口元、顎の輪郭からの判断だが、間違いはないだろう。また、白い布と称したそれがただの布ではなく全身を覆うローブだということにも気付く。
ノワールは内心で人でなければどうしよう、なんて考えていたりもしたので（やはり夢の中とは言え痛い思いはしたくないわけで）こっそりと安堵の溜息を零す。安心が生まれると油断が生じるのが人間の性なのか。ノワールは臆す素振り見せずに眼の前の人物へと一歩足を踏み出しかけたのだが、低くも高くも無い、中間の声によってそれは押し止められた。

「祈り忘れし迷い子よ、そなたの両手は何を「祈る」？」

唐突に投げかけられた質問は、淡々と抑揚なく響く。声からして男とも女ともとれるのだが、果たして実際はどちらなのか。どうでもいい事に思考を巡らせるほどにノワールは質問の意図か見えず、うっかり現実逃避してしまうのだが、ハッとしたように頭を振る事で己を取り戻した。
今、確実に眼の前の人物の雰囲気に呑まれてしまっていた。いや、もしかしたら見つけたその瞬間からその雰囲気に呑まれていた、といった方がいいのかもしれない。夢の中とはいえ好奇心で近づくべきではなかったのかもしれない、とノワールは早々に後悔していた。しかし相手はそんな後悔など露知らず。「私の問いに答えよ、迷い子。」と催促の言葉を一つ落とすのだ。

「私の両手は何を祈るのか、よね。……それって、どういう意味で？言葉のまま、でいいのかしら？」
「……。」
「他に意図があるのなら是非教えて欲しいんだけど――だんまり、よね。」

質問の意味を理解しきれずに問うては見たが、白い人――名前を聞いても応えてくれなさそうであり、男女どちらかも不明故にノワールが印象のまま決めた心の内での呼び方だ――は催促以降の言葉を紡ごうとはしなかった。求めるのは回答。それだけだと暗に言っているのが良く解る。それでも間違った答えを提示したくなくて問うたのだが、結果はけんもほろろに無言で断られてしまった。
自分勝手、もしくは、自分本位な性格なのだろうとノワールは解釈した。文句は一切受け付けない。そうして見せたのは白い人当人なのだから、自己責任というか自業自得というものだ。人間は受け入れられなければあっさりと手の平を返した態度を取る。ノワールの両親がそうだったように、ノワール自身もまた――――弱い人間なのだ。

（……彼なら、どうするかしら？）

ふと脳裏を過ぎったのは幾度となく逢瀬を重ねた黒の少年。突然空間を切り裂いて現れた大鎌を持った、死神の様な彼。普通の人間ではない事は最初の出会いからして分かりきっている。
黒髪、黒眼、黒のマニュキア、黒の衣装、全身が全て黒で覆われた深淵にも似た少年は、今この

場にいてノワールと同じ問いを投げかけられたなら、その問いの意味を問うて答えを返してもらえなかったのならば、どうするだろうか。
考えを巡らせても答えは出てこない。だが、彼ならきっと――……。

（真っ直ぐな答えを、偽らずに口にするんだわ。）

綻んだ唇は弧を描いて笑みを象る。ノワールが感じた彼の印象からの結論は、強ち外れていないような気がする。そして偽りもしない言葉を口に出せる彼はとても強いのだと、そう思うのだ。弱い自分とは大違いで、ほんの少し、嫉妬心が芽生えてしまうけれど。けれど嫌な嫉妬心ではない。心地よい嫉妬、と言えばいいのか。ノワールが初めて感じる感情の波なので、名前は上手くつけられない。くすぐったいような、一歩足を踏み外せばあっさりと溺れてしまうような、そんな感じだ。
――そこまで考えて思考がずれている事に思い至る。ハッとしたように慌てて白い人を恐る恐る不躾な視線にならぬように改めて見遣るのだが、パッと見では苛立ちも怒りも感じられない。その事に安堵しながらもこれ以上口を閉ざしたままというのは失礼なことなのだと改めて問われた内容を吟味する。
白い人は問うた。ノワールの両手は何を「祈る」のかと。その意味は言葉のままの意味なのか、それとも深い意味があるのかは未だ解らない。悩ませたところで理解など出来ようはずも無いのだろう。他人との関わりが滅多にないノワールでは、察することは幼子同様に未熟なのだ。勘がいいわけでもないから、考えるだけ無駄なのだと今更だろうが深みに嵌る前に全て放棄した。その上でこの両手は何を「祈る」のだろうか、と悩むよりも早く答えは口を吐いて出る。

「私の両手はきっと、彼の為に祈るわ。」
「――彼？」
「えぇ、彼――ブランと言う外見年齢は私と同じか一つ二つ上の男の人よ。」

実年齢は知らない。外見年齢=実年齢、というわけではないのは見ていれば解る。そもそもの出会いからして普通の生き方をしているとは思えないのだ。空間を切り裂いて現れる事が出来る人間なんて存在しないのだから。
そんな彼の為にノワールは祈る。きっと、自身の最後を迎えてくれるのが寡黙ながらも優しい彼だろうと思うから。しかし、重ねた逢瀬はきっとブランに傷を残すだろう。最初は互いにどう接すればいいか分からず、戸惑いと手探りでポツリポツリと会話を交わす距離だった。それが重ねた逢瀬の分だけ言葉が募り、想いが生まれ、ノワールはブランを知り、ブランはノワールを知ってくれた。親しみを抱くには時間は掛からず、「また、」という別れの約束もノワールとブランを繋ぐ鎖となった。
独りぼっちのノワールに光を与えてくれた彼だからこそ、二人の距離が愛しくて堪らない。もっとずっと傍にいたいと望むくらいに、ノワールはブランに依存していた。だが、叶わぬ夢の終わ

りは一歩、また一歩と近づいている。その終わりを告げるのがブランだとするのならばいっそのこと、と祈り想うのだ。

「いつか来る私の終わりを紡ぐだろう彼が傷つかない様に、私の全てを忘れて欲しいと祈るわ。」
「それこそが彼の者を傷つける祈りだとしても？」
「そうだとしても、忘れてしまえば傷跡すら、思い出せないでしょう？」

鮮やかに微笑んで見せるノワールの声は密やかな甘さを孕んで白い人へと届けられた。相手を――ブランを想うが故に、傷跡となってまで彼を苦しめたくないと思うノワールの祈りは白い人には傲慢に聞こえる。確かに忘れてしまえば傷跡は思い出せない。彼女自身の事を忘れるのだから、彼女が残す傷跡など最初からなかったものと扱われるのは当然の事だ。だが、忘れると言うのはいつか思い出す事でもあるのだ。
記憶は脳に刻まれたまま、引き出しを開けてしまえばあっさりと甦る。正し、その切っ掛けとなる出来事が彼の眼の前で行われなければ、の話になるが。たとえ切っ掛けと言えるような事が無くとも、心に刻んだ記憶は誰にも消す事は出来ないし、治す事も出来ない。忘れることなど、もっと不可能だ。柔らかな心だからこそ、受け止めた傷の深さは一生の痛みとなって記憶されるのだから。

「一時的な処置にしかならない「忘却」を「祈る」のは、傲慢と言えよう。」
「……。」
「忘れても、忘れても、心の傷跡は疼くもの。――永遠に忘れる事など、誰にも出来ぬ。それを承知の上で、そなたは祈るのか？」
「―――解らないわ。」
「解らぬ？何故？」
「確かに私は忘れてくれる事を祈るわ。それが彼を傷つける行為だと知っているけれど、それを承知で祈るのだから、傲慢だと言われても仕方ない事よ。でも……永遠に忘れる事が出来ない、ということを承知の上で祈るなんて考えてなかった。だから、解らないのよ。」

忘れる事で傷つかないでいてくれるならノワールは迷わず祈るだろう。彼がノワールの事で傷つくことだけは避けたかったから。
ブランに出会ってからこれまで、ずっとノワールは彼に沢山の光をもらってきたのだ。傍にいてくれる、それだけの行為が長年の寂しさを、孤独を癒してくれた。なのに自分が返せるものが傷跡だなんて、そんな悲しい事だけは嫌だった。どうせならブランにも光を返してあげたかった。でもそれが出来ないと言うのならいっそ――（私を忘れてくれたらいい、だなんて、）――傲慢にも程がある願いを祈ったのだ。
しかし白の人は言う。その忘却は一時的なものでしかないと。いつかは必ず思い出すと知って

なお、ノワールは祈る事が出来るのか。傲慢を貫き、偽善を願い、自分の死が突き付けるだろう傷跡を忘れさせてしまうことを。
ノワールの脳裏をまたブランが過る。寡黙で表情を動かさないブランは、いつも黙って話を聞いてくれている。時折相槌を打っては問いを投げかけてくれたりもするのだが、基本は聞き手役だ。別れ際は必ず次の約束を挨拶としてくれる。
これまでの記憶にある限りのブランの姿が映像となって現れては消えていく。交わした言葉も、触れた温もりも、何一つ忘れることなくノワールの中にある。それはきっと彼も同様の筈で。そんな大切な記憶を、ノワールは忘却の中へと落とす為に祈ると言うのか。
改めて己の傲慢さを感じて、ノワールは笑った。笑って、それでもなお、忘れて欲しいと祈るだろう、その答えに胸の奥を締め付けられた。

「私って、本当に傲慢ね。一時的なものだとしても忘れて欲しいと願うの。傷つかないで欲しいから、傷なんて残したくないから、なんてそんなの全部建前よ。本当は私――忘れてなんて、欲しくないの。」
「ならば何故「忘却」を「祈る」？普通ならば逆を「祈る」のではないか？」
「普通なら、ね。忘れないで、って祈るのはきっと簡単なの。だけど、いつか記憶は薄れていくわ。どれだけ大事な記憶でも、生きている以上は新たな記憶を築いていくものよ。古い記憶はそれに塗り潰されて、奥へと沈む。そうして、忘れてしまうの。「思い出」に変わってしまうの。」
「……「思い出」の一人となる事を恐れるか？」
「えぇ、恐れるわ。だから、私、忘れて欲しいの。思い出になんてしないで欲しいの。傷跡すら忘れ去って、そして――いつか思い出した時、私を永遠に、傷跡と一緒に、覚えていて欲しいのよ。」

いつからこんなにも傲慢になってしまったのか。死の先を待つばかりだったあの頃と大違いだ。あの頃の自分ならきっと、こんな祈りを持つことも無く、欲に塗れた傲慢さなど感じることも無く、静かに逝くことだけを望んで退屈と寂しさに埋もれていただろうに。
全ての変化はブランと出会ったあの日から。彼に出会って、ノワールは一人に慣れた諦めを、二人になる贅沢へと昇華させてしまった。欲はそこから生まれて育ち、また、彼への想いの種も蒔かれたのだろう。でなければこんなにも彼を、ブランを想うノワールの心を知ることは無かったのだから。
傲慢な想いを美しい微笑みで彩って、ノワールは言葉を締めくくる。

「そうすればきっと簡単には、記憶から消えないでしょう？」

謳う様に口にしたそれが、「祈り」に込められたノワールの想い。嘘偽らざる、彼への「祈り」だった。

## 第五話　笑みを零した白の少女はそう願い（後編）

ノワールが締めくくったその一言を、白い人は黙って聞いていた。残酷な一言だと素直に思う。そうしてまで縛り付けておきたいのか、とも。だが、ノワールの「祈り」の想いは只管に無垢なのだ。純粋な想いが欲に触れてしまった結果、それだけなのだろう。
誰かを想うということは、必然的に欲を生み出す。傍にいたい、言葉を交わしたい。それが簡単に叶ってしまえば次の欲が生まれ出す。触れたい、抱きしめたい。時間を掛けてそれが叶えばまた次の欲が疼きだす。
人間は一つを手に入れれば十を欲し、十が手に入れば百を欲する。終わりのない欲に振り回された結果は悲劇しか生み出さないが、ノワールの場合はノワール自身が悲劇となるのだろう。だからこそ、想いは純粋で無垢なままでいられる。たとえ傲慢な「祈り」であったとしても、だ。

「――彼の者の為に祈る、そなたの想いは哀しい。」

ポツリ、呟くように零れたその声に滲む慈愛の色は優しくて。最初に聞いた抑揚のない声は何処へいったのか。もしくは聞き間違いだろうか、と耳を疑った瞬間――ノワールは息を呑んだ。
いつの間にか白い人が三歩分の距離を残して近づいていたのだ。まるで瞬間移動の様に素早い動作にノワールは身動き取れずに固まってしまう。白い人はそんなことを気にせずゆっくりとその腕を持ち上げ、真っ白な指先をノワールの頬へと滑らせた。

「だが、きっとその祈りは届かぬだろう。そなたが人間（…）である限り。」

撫でる様に幾度も往復する親指。残りの指は触れるか触れないかのギリギリのラインでノワールの頬へと当てられていた。ノワールはどう反応していいのか分からずに固まった状態から立ち直れない。他者との触れ合いなど医者や看護師の健診の時くらいで、滅多矢鱈にこのような触れ方をされた事は無いのだ。ブランはどうなのかと言われればそんなものは言葉にする以前の問題である。ノワールの知る限りでブランが自身に触れた事は無いのだ。唯の、一度も（…）
経験不足と言ってしまえばそれまでの現状にどうすればいいのか。戸惑いと混乱に頭が占拠されてしまっていて、白い人の紡ぐ言葉は右から左へと流されてしまう。ちゃんと聞かなければと思うのに、触れる親指の温もりに羞恥が先走って上手くいかない。それを狙ってか否かは白い人しか解らぬ事だが、もしそうならば突き飛ばしてやれるのに、と混乱の極みを達したその時だ。

「定められた死を誘い、別れを紡ぐは黒き死神。全てを承知の上で受け入れるは白き迷い子。
――逃れられはせぬ運命は、刻一刻とそなたの前に姿を現すだろう。しかし、忘れるな。祈り忘れしはそなただけではないと言うことを。

忘れられた「祈り」は、死神も持ち得ていると言うことを。」

夜空が、静かに瞬いた。まるでノワールを憐れむように星が一つ、ゆっくりと流れて堕ちていく。頬に触れていたそれもまた静かに落とされ、白い人はノワールに背を向けて歩き出す。唐突に解放され、また、置き去りにされてしまうノワールは更なる混乱に眼を眩ませた。
定められた死を誘い、別れを紡ぐ死神。全てを承知の上で受け入れる白き迷い子。この二つに当てはまるのはきっと――――。

「待って！！貴方は何を、いいえ、貴方は一体、」

誰なの、と続く筈の言葉は呑みこまれた。彼女の一つの音が届いたのだ。聞き覚えのある低いそれは、どこか必死な様子を伺わせる。白い人もそれを聞いたのか、歩み進めていた足が止まり、頭が後ろへと反り返り空を見上げていた。

「――か。」

白い人の口内で紡いだかのようにか細い声はノワールの耳に完全には届かずに消えていく。そしてそれを気にとめた様子も無く、また歩みは進められようとしている。その間にもノワールに届く音は途切れ途切れの言葉となってノワールの耳朶を震わせた。

「…ワ……、…を覚……、ノ…ール…！」

全てが聞き取れたわけではないが、雰囲気からして焦りがふんだんに含まれているのがよく解る。それは彼女を現へと呼び戻そうとしているようだ。けれど今、その声に従って戻る事はどうしても出来なくて。抗うように耳を塞ごうとした両手を留めたのは、白い人の真っ白な両手だった。
いつの間に、とまた同じ事を思いながらも、ノワールはこの機会を逃すまいと真っ直ぐな視線を向けて唇を震わせた。

「――貴方は、一体、誰？」

簡潔な問いかけに白い人は淡々と、そう、淡々と、抑揚のない声で一言、紡いだ。

「そなたら人間が、否、生ある者全てが「神様」と呼ぶ存在だ。」

「神様」――そう名乗る眼の前の人物にノワールは思いきり眼を見開いた。まさかの神様。しかもそれが「夢」の中に登場してくれるなんて、普通の人間が思う筈がないし、ノワール自身も思ってもみなかった。しかし奇妙にもストンと納得のいく言葉であるとも同時に感じている。白い

人は紛う方なく「神様」なのだと、ノワールの魂が悟っているようだ。
神様は掴んでいたノワールの両手を手放すと、今度はノワールの両肩をトンと軽い力を込めて押した。突然とも言える突放しにノワールは逆らうこともできず、また、弱い力である筈なのに逆らうこともできないまま、その身を地面へと叩きつけるように背中から落ちていく。
ぶつかる、と強く眼を閉ざす。しかし背中を打ち付ける衝撃は一向にやってこず、恐る恐る瞼を開いた――と、同時に眼の前がグニャリと歪んでしまう。夜空に輝く星や一面に広がる薔薇達は皆、思い思いに横に伸びたり上下に縮んだりと姿を崩していく。最終的にはグルグルとマドラーで掻き混ぜられたかのように全てが混ざり合う光景の中、ノワールの意識は本人の意思とは関係なくプツリと途絶えていく。

「目覚めるといい。迷い子よ。――そなたを待っている、死神の元へ（…）。」

最後に耳にした神様の声は、優しい慈愛はなく、只管に感情の無い音程で、淡々と、淡々と――――……。

「……ール、…ワ…ル…、頼…から、眼を…ま……くれ、ノワール！！」

頭上から降り注ぐ力強い、焦りの声。力強い何かで両肩を揺さぶられているのか、押さえつけられているのか、とてつもなく痛い。自然と痛みに歪む眉間の皺。それを見てとったのか、両肩から何かが離れていくのを感じる。ノワールはそれに安堵したように小さく息を吐き出して、瞼を震わせながらゆっくりとそれを抉じ開けた。
ぼんやりと歪む視界。天井に取り付けられた明りが眩しい……と感じる筈なのだが、顔面に影が差しているからか眩しさを感じることも無く、寧ろ若干暗い様に思える視界をクリアにする為に瞬きを二、三度繰り返す。そうする事でようやっとまともに全てを視認できるようになったのだが、ノワールは自分の眼を一番最初に疑った。そして次にまだ夢の中にいるのではないかと己の頭を疑った。
眼の前にブランがいる。しかもノワールの顔を覗き込んだブランが、だ。百歩譲ってそこまではいいとしよう。問題はあの寡黙で無表情なブランが焦りと恐怖に顔を歪めているという事だ。
酷い物言いなのは自覚しているし、ブランとて感情が無いわけではない事をノワールはちゃんと理解している。しかし、滅多に表情を崩さないあのブランが、今は焦りと恐怖で顔を歪めているなんて信じられないのだ。その原因は一体何なのか、と考えた瞬間によみがえる、夢の中で聞いた言葉とその音を紡いだ声。

（――あぁ、通りで聞き覚えがある筈だわ。）

ノワールを目覚めさせようと必死だったのだろう。あの夢の中で耳に入りこんできた焦り声は彼のもの。そして目覚めた今なお消えぬ焦りと恐怖は実感しきれないからかもしれない。ちゃんとノワールが目覚めているのだと言う現実に。ちゃんと彼の声を聞いているのだと言う事実に。
ゆるりと瞼を閉ざした。じわりと滲むように胸の奥に広がる想いに浸る為に。けれど、それは今すべき事じゃなかったのかもしれない。ノワールがちゃんと目覚めたのだと自覚させる事を後回しにした所為で、ブランは感情の赴くままにノワールの両肩を掴んできたのだから。
鋭い痛みが走る。身に覚えのあるその痛みは目覚める直前感じたものだ。ここでもまた、彼の焦り具合、恐怖の度合いが感じられてしまう。瞬間、歓喜の波が心を埋め尽くした。彼にそこまで想ってもらえていたなんて、知らなかったから。彼を焦らせるほど、恐怖を抱かせるほど、彼の心の片隅に自分が居ただなんて、知らなかったから。ノワールは言葉にならない想いを改めて自覚した。そしてそれが溢れだすままに唇を綻ばせる。
改めて開かれた瞼の奥に隠された瞳が、ブランをしっかりと捉えた。彼の戦慄く唇がきつく真一文字に引き結ばれている。沢山の不安と、心配を掛けたのだと一瞬にして理解した。ノワールの中に申し訳ないという感情が生まれないわけではないのだけれど、それを上回ってしまう自己中心的な感情が一つ、大きく芽吹いてしまっていて。

「おはよう、ブラン。」

愛しいと、訴えかけるような微笑みと共に間の抜けた台詞が口を吐いて出てしまうのだ。
ポカン、と呆気にとられたような表情を見せるブラン。ノワールは新たな一面を見たと内心大喜びだったりするのだが、それを気取られるような真似はしないし、ブラン自身にそんな余裕は無かったりする。
ブランは何か言いたそうに引き結んだ唇を解いたけれど、すぐにそれはまた閉ざされてしまう。ゆっくりと両肩を掴んでいた手から力が抜け落ちたと思えば、彼の頭も力を無くしたように落下。着地地点はノワールの首筋で、そのままパズルのピース同士をはめ込むようにピッタリと合わさったまま動かなくなる。だがそれはノワールも同様だった。
まさかのブランの行動に飛び跳ねた心臓。身体は硬直したように動かない。ギシリ、二人分の体重が掛かったベットが悲鳴を上げた。なんとも言えない緊迫した空気にノワールの鼓動は更に高鳴り、頬は自然と紅潮していく。微かに零れるブランの吐息が首筋を擽っては消えていく。それだけ近くに彼の存在を感じる事が初めてのノワールにとって、今の現状は過酷なものとしか言いようがなかった。
だから、この状況をどうにかしようと絞り出したノワールの声が裏返ってしまっていたのは御愛嬌というものだ。

「ブ、ブラン？あの、どうし……。」

「よかった、ちゃんと、目覚めてくれて。」
「え……。」
「魂が、夢に囚われていた。」
「魂、が？」
「そうだ。だから、何度も呼びかけた。夢から目覚める事でしか、魂は呼び戻せない。」

淡々と零れる言葉の意味は分かっても、理解にまでは及ばない。確かにノワールは先程まで夢を見ていた。だがそれに囚われていたかと言われれば首を傾げてしまう。ノワールからすれば夢を見ることは当たり前のことだったから、囚われるという感覚が無いのだ。眠りの中に見る夢ではなく、野望や将来の夢といったものに囚われると言うことはあるだろうが、ノワールにはそんなものに囚われる時間が無い。夢で出会った神様の言葉が正しければ、終わりはもうじき訪れるのだから。
ブランの言葉から夢の内容を思い出し、物思いに沈みこんでいくノワールは既にいつもの状態を取り戻していた。と言っても考える事に夢中になって現状を忘れてしまっているだけなのだが。
そんなノワールを現実へと引き戻すのはブランだった。埋めていた顔を上げようとした瞬間、ふわりと鼻を擽った香り。それはブランにとって身近な香りであり、ノワールの身に付着する筈の無いモノで。しかし完全に判断するにはその香りは薄すぎた。
気のせいかと見過ごす事も出来たが、先程まで夢に囚われていたノワールを思えば気のせいとは言い切れない。もし囚われていた夢がブランのよく知るあの場所であったのなら、ノワールは――――――ブランは嫌な予感を抱いていた。心の底から外れて欲しいと願う予感を。

「――ノワール、少しいいか？」
「……？何？」
「身体を起こして欲しい。出来るか？」
「えぇ、大丈夫だけど……あの、ごめんなさい。一度、離れてもらえるかしら？」
「あぁ、解った。」

言われるがままにすんなりと身体を離してくれたブランにノワールは安堵と寂しさを感じては一人あたふたと表情を変化させてしまう。安堵はまだしもどうして寂しいなんて、と火照る頬を俯く事で隠しながら両手をベッドに押さえつけるようにしながら上半身を起こした。
長く眠っていたのか、少しばかり身体がだるさを訴えるけれど無視できないほどではない。ノワールは枕をクッション変わりにして背を預けながらこれでいいの、と問いかけようとしたが、その言葉はブランによって阻まれた。

「……やっぱり、あの薔薇の香りがする。」
「！！？？」

ノワールから漂った香りが嘘か真か、果たしてどちらなのかを掴み損ねたブランは一度離した距離をもう一度縮めて、今度は先程よりも深く首筋に顔を埋めては鼻を押し当てて匂いを嗅いだのだ。
これで何度目の硬直になるのか。ノワールは身体の全てをガチガチに固まらせては息を呑みこんだ。何がどうなってこうなったのか解らないのはノワールだけ。ブランに理由を問いかけようとも口はパクパクと金魚の様に開閉してばかりで役に立たない。
そうこうしている間にブランはその位置を徐々に移動していく。首筋から耳朶の裏、耳朶の裏からまた首筋、と思いきやそのまま鎖骨へ下って――胸元に咲く、一輪の薔薇へと鼻筋は押し付けられた。

「何故お前から、楽園の薔薇の香りがするんだ？もしかして、お前が見た夢は――。」

嫌な予感が当たってしまった。ブランは咄嗟にそう判断した己の頭に舌打ちを零す。しかし何故、彼女があの場所へと足を踏み入れたのか。それともあの方（…）に招かれたのか。
どちらにしてもブランは覚悟を決めなければならない。ノワールの薔薇へと刃を振りおろす、その覚悟を。

「……ッ……ブランッ！！」
「！！」

大きな声と共に無理矢理引きはがされる頭。ブランは驚いたようにノワールを見遣るのだが、その表情はすぐさま心配そうに眉尻を下げる。真っ赤に染まったノワールの顔を熱を出したのかと解釈したからだ。
実際にはブランの行動による羞恥に耐えきれずの熱が表面に出てしまっているだけなのだが、そういったことに察しが良くない、基、理解の無いブランは只管に心配そうな雰囲気を崩さない。ノワールもノワールでこういった接触を殆ど経験していないから、羞恥がぐつぐつと煮え滾っている衝動を抑え込むのに必死だ。
二人の間に沈黙が流れる。ちぐはぐな空気が生み出すそれはどちらも最初の一歩を踏み出せずに口籠るばかり。このまま時が過ぎるのを待つばかりか、と思われたその時。遠くから足音が聞こえてくる。どうやらいつもの定期健診の時間が来たようだ。
二人して扉を見遣り、また、二人して互いの顔を見遣る。同じ動作を同じタイミングに繰り返して、最後には顔を見合わせる。息の合ったコンビネーションと言えばいいのか、それとも、唯の仲良しなのだと締めくくるべきか。

「……ふふ。」

ノワールの口から自然と零れたのは微かな笑い声。先程までの空気を吹き飛ばすには十分なそ

れに、ブランも口元に笑みを刻んだ。
穏やかなその瞬間をまだ堪能したい気持ちはあれど、ブランがいつまでも此処にいるわけにはいかないし、見つかるわけにもいかないのだ。何も知らない人間からすればブランは不法侵入者で、そんな不法侵入者を受け入れている患者のノワールは被害者になる。最悪の場合は共犯者にすらなりかねないのだが、ノワールの立場を考えれば万が一の可能性にもならないだろう。しかし、見つかれば迷惑を掛けてしまうことだけはブランにも解っている。だから傍にいたいと思う気持ちを押し殺し、ブランはいつも別れを紡ぐのだ。

「それじゃあ、オレは行く。」
「えぇ。……あ、行く前に一つだけ。さっきみたいな事、唐突にしないでね？心臓に悪いわ。」
「？……あぁ、あれ、か。分かった。なら事前に確認してからにする。」
「そういう問題でもないんだけど……まぁ、確認があるならいいのかしら？」

淡々と紡がれる彼らしいと言えば彼らしい返答に、ノワールは困った様な笑み浮かべながらもひとまずはそれで良しとしたらしい。頷きを見せて念を押す様に「約束よ。」と軽やかに微笑んだ。ブランも鷹揚に「あぁ。」と頷きを一つ。その手にいつものように大鎌を出現させて空間を切り裂いた。
重ねた逢瀬の数だけノワールは別れ難さを感じる。そんな気持ちが自分の中に生まれたのはきっと、いや、絶対にブランの所為だ。だがそう思っているのは自分だけではない事をノワールは知っていた。
切り裂かれた空間を前にして、ブランはノワールを振り返る。表情はもういつも通りに無表情に彩られるも、瞳は多弁だ。滲む名残惜しさはきっとノワールのそれと変わりない想いだろう。

「また、」
「えぇ、また、会いましょう。」

いつものように別れの言葉を交わし、ブランは切り裂いた空間の中へと足を踏み出してはその身を沈めた。全身が向こう側へ消えると同時に切り裂かれた空間は何事も無かったかのように閉ざされてしまう。
一度その空間が本当に閉ざされているのか気になって手を伸ばしたが、空を切っては何も掴めないし触れることすらできはしなかった。どういう原理なのかさっぱり解らないが、超人的な事をあっさりとやってのけるブランに苦笑いを滲ませてしまうのは、手の内をばらしてしまっていいのかという心配からだ。
きっとブラン自身は考えもしていないのだろう。そう在る事が彼にとって当たり前になっているのだから。けれどノワールのいる現実では当たり前ではなく非現実として扱われてしまう。見つかってしまえば研究対象にまっしぐらだ。

「まぁ、私の前以外にあんな風に姿を現さなければ問題は無いんだけど……。」

そう考えてズキリと痛む心にまた苦笑い。夢でまざまざと自覚した傲慢な祈りが、想いが、ノワールの胸の内を占領していく。彼の中に一生残りたい。忘れて欲しくない。だから、忘れて、思い出して、一生その傷跡を抱えて生きていってほしいと祈る。たとえ届かぬ祈りであったとしても、ノワールはずっと願い続けるのだ。命尽き果てる、その瞬間まで。

# 第六話　星屑に託した黒の少年はそう望む（前編）

　全ての始まりは黒だった。上下左右、全てが闇色に染まる世界の中心で、少年の魂は生まれた。淡い輝き放つそれは徐々に人の形を象り、自然と輪郭が浮かびあがっていく。
両腕で両足を抱え込むように丸まった、胎児のような姿で闇の中に現れた少年。外見からして七、八歳くらいだろうか。筋力の無さそうな細い両腕両足が幼さを際立たせていた。
小刻みに震えた瞼がゆるりと開かれる。光の差さない瞳は空洞のように底が無い。まるで壊れた人形の瞳の様だ。見つめていれば魂が喰われてしまうのでは、と錯覚してしまう。そう考えればこの場に少年以外の存在が居なかったのはある意味で救いだろう。
形を得た少年はまず意識を生み出した。脳、聴覚、視覚、神経、感覚、その他諸々の機能を一つ一つ構築していく。その感覚はやけに鮮明な記憶の一つとして少年の中に残される。
全てが明確なものとなった頃、頭上から声が一つ降り注いだ。
「目覚めよ、哀れな魂よ」
　淡々とした、感情のこもらぬ文字の羅列。振り仰いだその先には誰もいない。しかし声は確かに少年の耳に届いていた。
初めて得た言葉。それを放った主は何処に、と視線を巡らせた瞬間、少年の足元は音を立てて崩れ落ちた。
硝子が砕け散った様な音が残響となって広がる。落ちる身体は抵抗する力を知らぬまま、なすがまま。少年は落下する己の身体を他人事のように受け止めていた。落ちている事を理解していても、それが最悪なことなのだと感じていないのだ。
少年は重力に身を委ねたまま、視線は空を見上げる。自分を呼んだであろう声がした方向を見据えたまま、意識は耐えきれないと悲鳴を上げるようにプツリと途絶えた。

　浮上する意識。見開いた瞼。両眼に映る夜色は煌めく細かな輝き達にそっと飾り立てられていた。
　眼に映る世界を少年は知らなかった。ただ、素直に綺麗だと感じるだけで、それが夜の光景だとか、輝いているのは星だとか、そういった知識は一切存在しなかった。
瞬きを一つ落とす瞬間と共に流れた一つの輝き。まるで役目を終えたと言わんばかりの潔さに少年は酷く驚いて、もう一度それを見る事が出来ないかと必死に瞬きを堪えて見つめるのだけれど、星は一つも落ちてこない。
　こればかりは時の運だ。願っても流れてくれるものではないのだと自然と感じ取った少年は早々に興味を無くした。
次いで鼻を擽る香りに視線を横へと向ける。横たわった姿勢から見える風景は一面に広がる細長

い緑の茎。よくよく見れば鋭い棘や葉っぱが生えているようだ。
しかし、香りはその茎から漂ってきているわけではない。茎に副食品としてくっついている棘からでも、葉っぱからでもない。ではどこからだろうか。
少年は視線を茎の下部から上部へと動かし、ようやく香りの主を見つける。
最初に映り込んだのは赫。純血よりも色濃く、気高いそれは見るもの全てを惹きつける魅力があった。
次に映り込んだのは美しい膨らみ。それを大きく広げては幾重もの布を重ねて生まれてきたかのような高貴な姿に、少年は言葉も無く見惚れていた。
身体を起こし、顔を近づけてまじまじと見つめる。先程よりも濃厚な香りが鼻先を悪戯に擽っては消えていく。それを不快に思う気持ちは無く、寧ろ酔いしれてしまうような感覚に囚われた。
触れても大丈夫だろうか、と思う反面、触れてはいけないと思う。柔いそれは簡単に毟り取れそうで恐かったのだ。疼く好奇心を諌めながら、少年は頭の中で「これはなんという名前なんだろうか」と呟いた。
「それは花。名は薔薇。しかし、普通の薔薇とは違う。魂の薔薇だ」
――まさかの返答が返される。少年は驚きも露わに背後を振り返った。そこにはいつ現れたのか解らないが、白い塊が立っていた。
身体を白い布で隠す様に纏い、頭に該当するだろう部分はそれをフードにして被る事で隠している。辛うじて覗き見える唇と顎の輪郭から、背後に立っていた塊は自分と同じヒトなのだと理解した。
全身白尽くめの不審者。しかし少年は相手に対して警戒心を抱かなかった。
初めて出会った少年と同じ姿をした人物だ。会話が通じる事は既に証明されている。そして何よりもその声が物語る事実が一つあった。
「お前が、俺を目覚めさせたのか？」
　少年が生まれた黒の中で響いた声。それは眼の前の人物が放った声と同じだったのだ。
自分を目覚めさせた相手に警戒心が湧かない少年は、それを少しばかり不思議に感じていた。
己の頭の中で呟いた声を聞いては返答を返すような人物なのに、不快感は無い。寧ろ眼の前の人物だからこそそれが出来るのだと納得しているような奇妙な感覚があるばかり。だがやはり警戒心が生まれる事は無く、事実としてストンと納得しているような感じだ。
警戒心が生まれない理由が、姿形が同じだからという事ではないことは分かる。それは殆ど本能に近い理解だ。同様に警戒しないという理由も本能に近い理由だろうか、と少しばかり思考の渦に呑まれかけていた時、見据えていた人物の唇がゆるりと答えを紡いだ。
「目覚めさせたのは確かに私だ」
　淡々と淀みなく落とされる言葉に感情は宿らない。音として落ちては消えるのみ。対する少年の声も淡々と響いては風の中に溶けていく。
「何故？」
「何故、とは？」
「何故俺を目覚めさせた？　俺はあの場所で生まれた。なら、あの場所で居るべきだったんじゃ

ないのか？」
　黒だけの世界の中で自分の魂が生まれた事は自覚している。そこで構築した記憶は少年の中で一番真新しい記憶だ。あの場所がどういう場所なのかは解らないが、それでもあそこが在るべき場所なのだと思うのは、少年の魂があの黒を求めているからなのだろうか。
しかし白を纏った人物は首を横に振る。
「それでは困る。そなたには定められた宿命がある。それをこなす事はそなたの運命だ」
　そう前置きして語りだした事は、少年の出生についてだった。
「そなたの魂はそなたとして生まれる前に一度別の形で生まれる筈だった。あの場所ではなくある世界に人間として――この箱庭に咲く薔薇一輪の魂として、だ。しかし、世界の中に産まれる前に、そなたが入るべき肉体は滅んだ」
　語られる事実に衝撃は感じない。ただそうなのか、とあるがままを少年は受け入れる。
少年には実感が無かった。白を纏った人物が語る言葉に嘘は無いと解るのだが、それが自分に置きかえられた話だと言われても、少年が少年として持っている意識はあの黒の世界から始まっているのだ。それ以前の過去の話をされても受け入れる以前の問題で、正直なところどうでもいいのだ。
少年の態度からそれを感じ取っているのだろうに、それでもなお少年の過去――魂の終わりと新たな始まりを語り続ける。
「肉体を亡くした魂は彷徨い、この箱庭の外で朽ちかけた。私はそれを掬いあげ、箱庭とはまた別の空間の中でそなたを生み出した。――そなたはヒトとして生まれながらもヒトに非ず。そなたは死神として、生を赦されたのだ」
　ここまで話して一度一区切り置くつもりなのか、白を纏った人物はゆっくりと息を吐きだす。
少年は告げられた言葉を自分なりに噛み砕いて解釈しては頭の中へと叩きこんでいく。この段階でも嘘はない。なら、自分はヒトではなく死神というのも事実なのだろう。
一度は人間として生まれる事も出来たようだが、それはもう叶わぬ身となってしまった。それを悲しいと感じる心は無かった。
　何度も言うようだが、少年にとってそれらは全て過去の事だ。寧ろ少年自身の話と言えるかどうかすら分からない。全ては少年を形作る前の魂の話だから。
ふと、何かを気にするように少年の視線が彷徨った。問うべきか、問わぬべきか。そもそも口を挟んでもいいのかどうか。
少年の戸惑いを見咎めたのか「言いたい事があるなら言うといい」と言葉を促してくれる。少年はそれに甘える形で口を開いた。
「――今更だが、お前は誰なんだ？」
「……本当に今更だな。そして唐突だ」
「自覚はある。だが、名前も知らないままだと気付いたのはついさっきだ。尋ねる前に別の事を気に掛けていて、聞く事も思いつかなかったしな」
「なるほど」
　今更且つ唐突とも言える内容に驚いたように口を開いたが、少年の弁明に確かに一理あると

頷く。それにこっそりと安堵しながら少年は改めて問いかけた。
「で、お前は一体誰なんだ？　名前はあるのか？」
「私は――人間が、生ある者全てが「神様」と呼ぶ」
「神様？」
「そうだ。全てを創造せし者であり、全てを見守る者。――手は下さぬ、差し伸べぬ、唯の傍観者だ」
　一切の感情を削ぎ落とし、音としてすら意味を持たぬ言葉をただ並べただけの様な返答に少年は戸惑いを覚える。
神様と名乗った――実際には名乗ったと言うよりは立場を告げただけになるのだが――眼の前の人物はそれをどうとも感じていないと言うことがよく解るのだが、傍観者とはどういう意味なのだろうか。
知りたい、と思う。好奇心や興味からではなく、ただ少年自身の心がそう望んだ。それは少年の中に神様に対する意識が芽生えた瞬間だった。
だが、それは叶わぬ願いとなる。
「私を知ろうとするな、死神よ。そなたが知るべきはそなたの役割。これからこの場所で生きていくに必要な知識、それだけだ。それ以上を求める必要はないし、求めたところで手に入らぬものと心得よ」
　思考を読まれた事につい驚いてしまうのだが、すぐに思い出す。二度目に声を掛けられた瞬間もそうだったと言うことを。
だが少年は神様の言葉に素直に頷けなかった。何故眼の前の人物を知ることは禁じられるのか。知るべき事と称される役割、知識は確かに「死神」としては必要だろう。筋が通っているから納得もできる。
しかし、少年個人の意識にまで口を挟まれるのは流石に歓迎できる事ではなかった。暫し無言の抵抗を示してみせるのだが、神様には暖簾に腕押し、糠に釘とまるで意味のない反抗でしかないようで。寧ろ同じように黙りこまれている時点で喋る事は絶対にないのだと言外に訴えているようだ。
少年は神様の口を割る術を知らず、また、言葉で言い負かせられるとも思えない。結局は言いなりになるしかないという現実に苛立つ感情の波。それを無理矢理抑え込んでなんでもないような態度を取って見せるのは、意地っ張りな子供と言えよう。
神様としてはそういった感情を死神が示すのはあまり褒められたものではないと考えるようで、その辺りも含めて指導しておくべきか、思案する。
だがその考えは早々に放棄した。必要以上の関与をする気はない。神様という名の傍観者である以上、深入りと同様な行動は慎むべきだ。
それに彼に会うのはよほどの事が無い限りこれきりで終わりだろう。これから先、長い時を彼はこの世界で一人生きていくこととになるのだから、この時の意識も感情も全て埋もれて消える筈だ。死神としての役目を考えればなおの事。故に神様は淡々と必要な事だけを少年へ与えたのだ。

「そなたはこれからこの箱庭で一人、死神として生きる事になる」
「……お前は、居ないのか？」
「私はこの箱庭に住まうものではない。何より、全てを見守るにはこの箱庭は狭すぎる」
「……」
　黙り込んだ少年はやはり不満があるようだ。しかし神様はそれを全て無視して話を続ける。
「この箱庭は魂を生み出し、魂を奪う場所――人間は此処を天国と呼ぶ」
「天国……」
「そうだ。人間の魂はこの場所から生まれる。……そなたも見たであろう？　この箱庭一面に広がる薔薇を」
「あぁ。あの赫い花、だな。」
　言われて脳裏に浮かべたのは初めて眼にした赫とその美しさ。見惚れる程に魅了されていたそれは、神様曰く「魂」らしいが、果たしてどういう意味なのか。
少年自身も今の自分になる前はその薔薇の魂として生まれたと言っていたが――もしや、と脳裏に過る一つの答え。神様はそれを感じ取ったのか、然りと頷きを一つ落とす。
「そなたの考えた通りだ。この箱庭に咲く薔薇は全て人間の「魂」そのもの。薔薇が一輪蕾を付けて生まれれば、魂が生まれる。花開けばその魂はある世界で産声を上げ、産まれる。枯れればその魂は死の間際――そなたにはその死の間際の薔薇を刈り取ってもらう」
「なっ……」
　魂を刈り取る。それが己の役目だと、神様は言う。あんまりと言えばあんまりな役割に絶句した少年は言葉を無くしたように途方に暮れていた。
それは普通の反応であり、当たり前の反応だ。だが宿命は少年を逃しはしない。定められた運命の輪は、少年が生まれたその瞬間に廻り始めているのだから。
「死神とは、死を与え、生を奪う者。そして奪いし魂を全て記憶する者でもある」
「魂を、全て？　それは可能なのか？」
「可能だ。そなたは死神として存在している。それ故に一度見た光景は全てその脳に刻み込まれ、忘れることは一切ない。それも役割の一つだからな」
　簡単に忘れられるようなモノではないと暗に告げられ、少年は複雑な顔をした。役割と言われてしまえば受け入れるしかないのだろうが、だからと言って簡単に受け入れられるほど心は強くなかった。要は、死神を甘く見ていたのだ。
自分が死神だと言われて納得したとしても、それは立場の話だけ。死神としてやらなければいけない事に対して少年は一歩を踏みきれなかった。割り切ってしまえるほどに成熟した精神を持ち合わせていなかったもの要因の一つと言えよう。
だが、それは仕方のないことなのかもしれない。まだ生まれて間もないのだ。覚悟が伴わないのは当たり前の事である。同時にそれを考慮してやれる時間も無いのだ。
「人間の生は有限である。生まれた命は死という終わりに向かって歩むもの。だが、人間の生に対する執着心は強い。死にたくはないともがいた果てに、輪廻の輪へと還ることなく世界にしがみついて魂を穢しては堕ちる」

「輪廻の、輪？」
「一度死んだ人間がまた新たな魂となって生まれる為に向かう場所だ。本来ならそなたもその場所へと向かう筈だったが――」
「辿りつく前に朽ち果てそうだった、と」
「その通りだ」
　なんとも間抜けな、と我が事ながら呆れてしまう。しかし、やはり自分自身の事というより他人事になってしまうのは記憶にない過去の事だからだろうか。それとも経緯はどうであれ「自分」として生まれてしまったからだろうか。
どうにも複雑な心中を持て余しつつ、少年は神様の続きに耳を傾けた。
「話を戻すとして――堕ちた魂だが、あれはもう輪廻の輪には還れぬ」
「何故だ？」
「輪廻の輪は穢れた魂を受け付けぬ。だからこそ、死神が堕ちる前にその魂を刈り取り、正しき道へと歩ませる――死神とは要するに憎まれ役の様なものだ」
　さらりと告げた神様は己が手の中に一振りの大鎌を出現させた。少年の背丈を軽々と越える長さを誇るその大鎌は闇を凝縮したような色合いをしている。
ジッとそれに見入る少年に対して、神様はそれを眼の前に差し出した。驚く様子を見せない少年はその意味を既に悟っているかのように、静かに神様へと視線を転じる。
　神様は厳かに口を開き、少年にその宿命を告げる。
「そなたにこの大鎌「プシュケ」を託す。これを使ってこの地に咲く薔薇を刈り取れ。しかし刈り取る薔薇は枯れ逝く薔薇――死に逝く魂のみだ」
「……」
「死神としての宿命は重い。死を与える存在として在る事を赦されたそなたの命に終わりはない。生を奪う咎は永遠の生をもってして贖われる」
「……」
「終わり無き永遠を生き続け、宿命の命ずるままに生を奪う矛盾。そなたが生まれし瞬間に背負った運命を、そなたは全うする覚悟があるか？」
　最終告知のように告げられたそれに対して、少年は迷いを見せなかった。
　伸ばされた両手はしっかりと大鎌の柄を握り、神様の手から受け取る様にして己の胸元へと引き寄せる。若干重みにふらついたのはご愛嬌だ。
「覚悟があるかどうかなんて、解らない。だが――俺がやるべき事が、死神が行わなければいけない事があるのだと言うのなら、俺は俺の意思でそれを選ぶ。そこに後悔は、無い」
　複雑な思いは未だ消えない。覚悟なんて言われたところで持てる筈も無い。けれど、眼の前に差し出された運命から逃げる程弱虫でもない。
少年は自ら選ぶと口にした事で、宿命を受け入れた。死神としての覚悟の一歩を、無意識ではあるが踏み出したのだ。
神様はそれを認め、ゆるり、開いた口が一つの名を紡いだ。
「ブラン」

「……ブラン？」
「そなたの名だ」
「俺の、名前……」
　少年は茫然と神様を見つめた。
ブラン――それは名前。自分の名前。自分を自分たらしめる、名前。自然と熱くなる心臓。目頭までもじわりと熱を帯びてくる。
咄嗟に少年――ブランは顔を俯かせた。競り上がる感情の波をどう押し殺せばいいのか分からずに、とにかく顔だけは隠そうとした結果の行動だ。
　神様はそんなブランを慈しみと哀しみを込めた瞳で見つめる。しかしそれも一瞬の事。踵を返した神様の瞳からは感情の色は全て抜け落ちていた。
「ブラン、己が役目を果たせ。宿命を全うせよ。――その両手で、死を誘え」
　衣擦れを立てながらも静々とした歩みで遠ざかる神様の背中を、ブランは涙に濡れる瞳で見つめた。瞬きはしない。この涙を零すのは何故だかとても悔しかったから。
一度大鎌の刃の部分を地面へと置き、身体に沿わせて片腕で抱え込むようにして持ち直す。そして空いた手で浮かんだ涙を拭ったなら、改めて大鎌を持ち直した。
最初の時の様にふらつきはしない。しかしまだ持ち慣れぬそれに振り回されそうな感じがして危なっかしいのも事実だ。
ブラン自身も感じているのだろう。暫くは筋力を付ける為に運動しなければ、と溜息を吐いたその時だった。視界に入りこんだ薔薇一輪。その色は綺麗な赫とは程遠い、薄汚れた茶色で――「プシュケ」――呼んだ名前に呼応するように大鎌はいとも容易く枯れ逝く薔薇を刈り取った。

――これが、ブランという名の死神の、初めての記憶である。